

其六

文部省著作

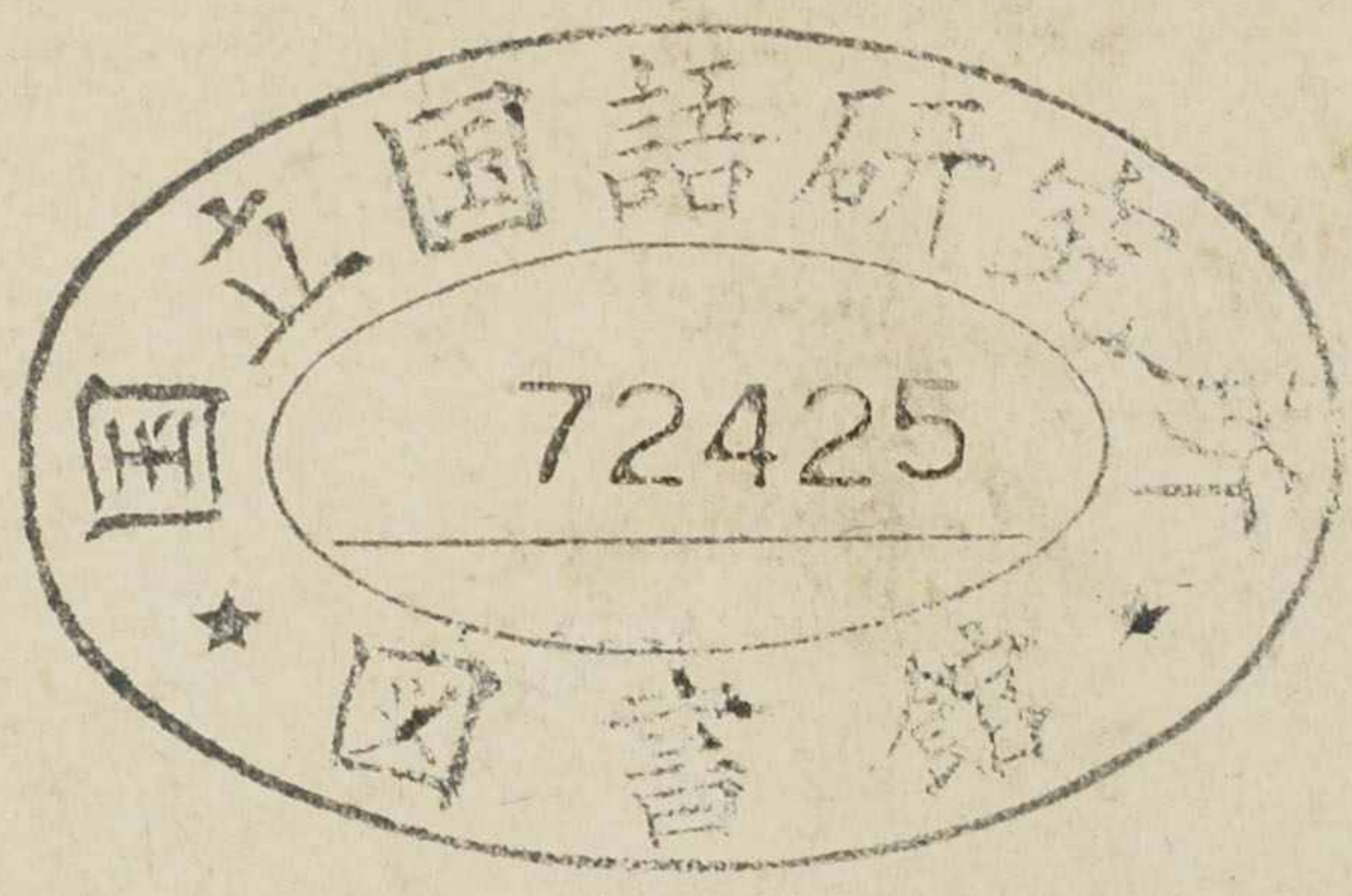


尋常小學校讀本 六

發行所 日本書院

K13
Mo
e

河



文部省著作

尋常小學讀本
六



發行所 日本書籍株式會社

もくろく。

第一	京都市。	一
第二	織物。	四
第三	稻かり。	十一
第四	鎌倉。	十六
第五	元寇。	二十一
第六	石炭ト石油。	二十四
第七	ろーそくの話。	二十七
第八	大坂市。	三十五
第九	豊臣秀吉。(一)	三十九
第十	豊臣秀吉。(二)	四十三
第十一	としのくれ。	四十六

第十二	新年のいはひ。	四十九
第十三	商業。	五十二
第十四	銅と鐵。(一)	五十八
第十五	銅と鐵。(二)	六十三
第十六	兎。	六十七
第十七	草木ノカケクラブ。	六十九
第十八	明治二十七八年戦役。(一)	七十三
第十九	明治二十七八年戦役。(二)	七十七
第二十	臺灣。	八十一
第二十一	北白川宮。	八十五
第二十二	砂糖ト塩。	八十八

第 一 年 市

第一

京都市キョウトシ。

京都市キョウトシハ桓武天皇カンムテンノノ時カラ、今上天皇陛下キンジョウテンノヘイカ

ノ東京市トウキョウシニオウツリニナツタ

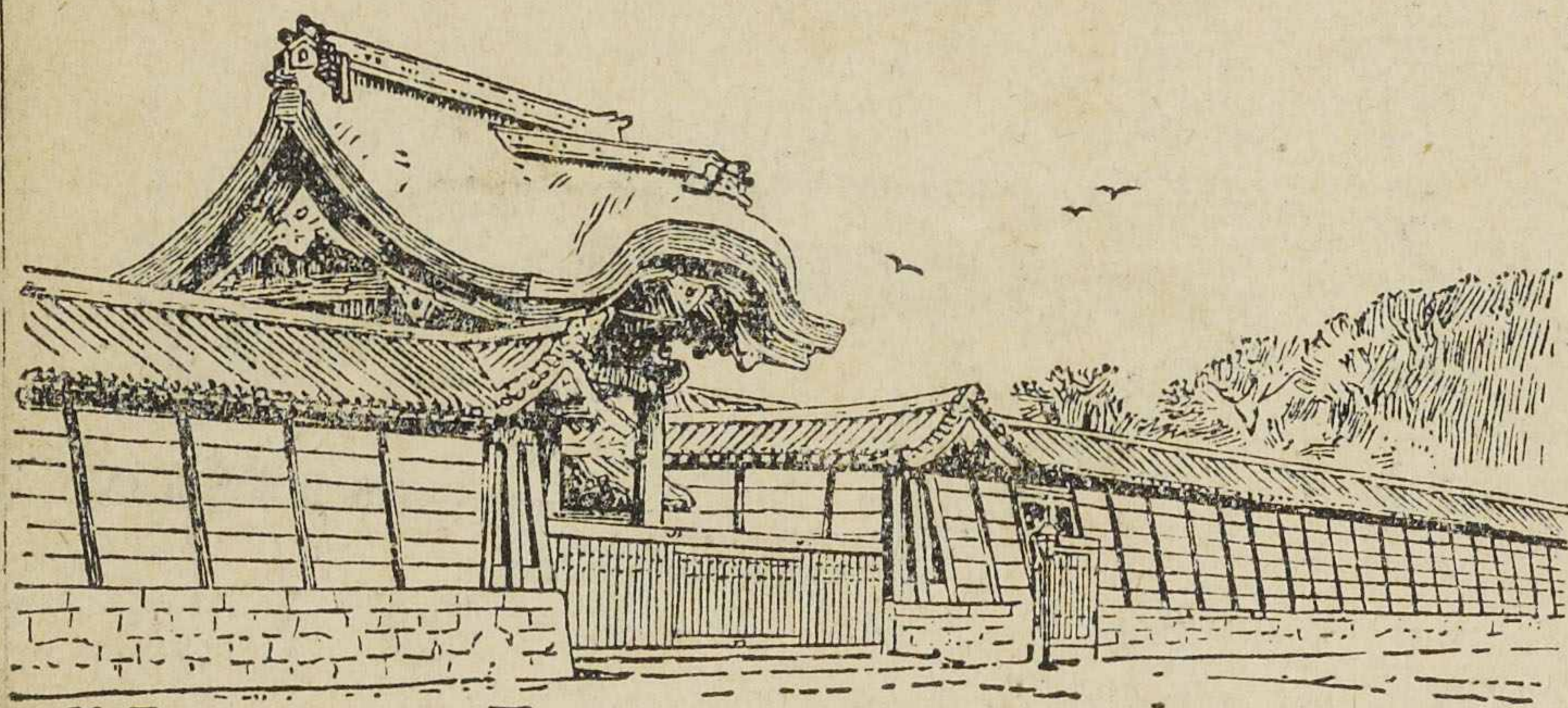
時マデ、一千年アマリノ間、天

皇ガ、ヒキツヅイテ、オイデニ

ナツタトコロデアル。

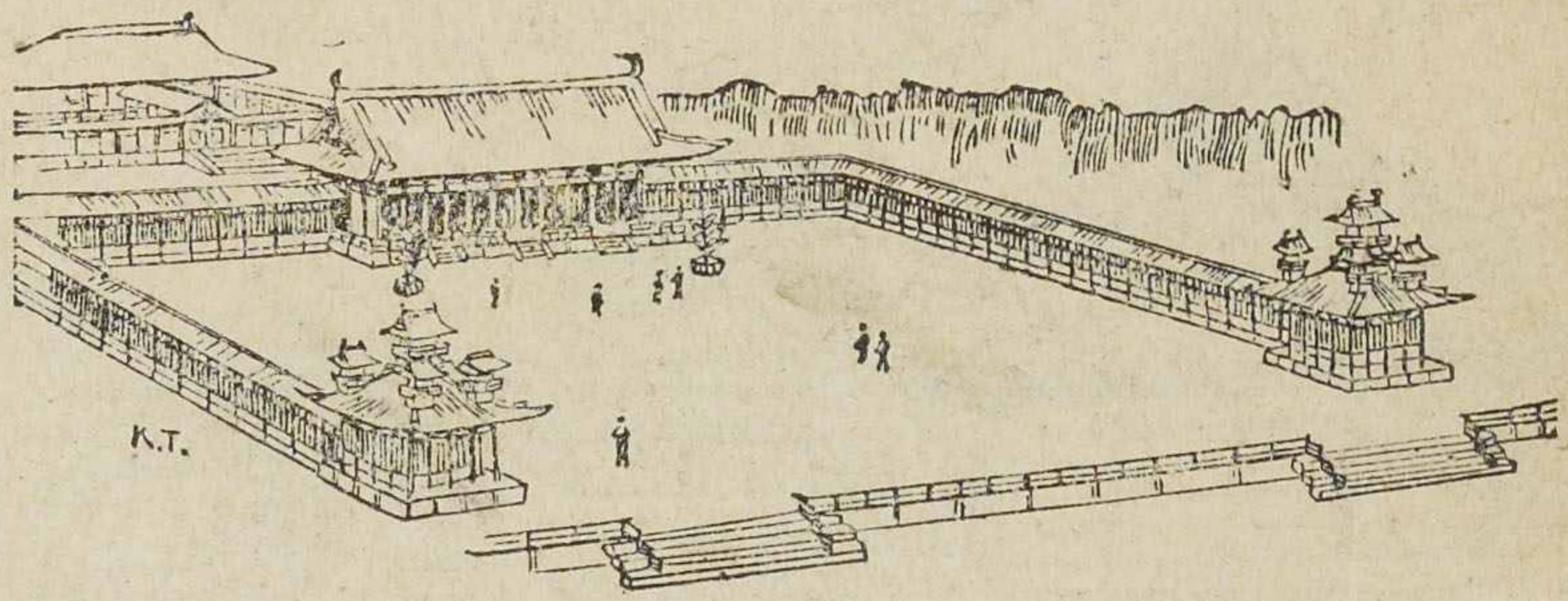
京都市キョウトニハ、天皇ノオイデニ

ナツタ皇居コウキョヲハジメトシテ、フ



K.T.

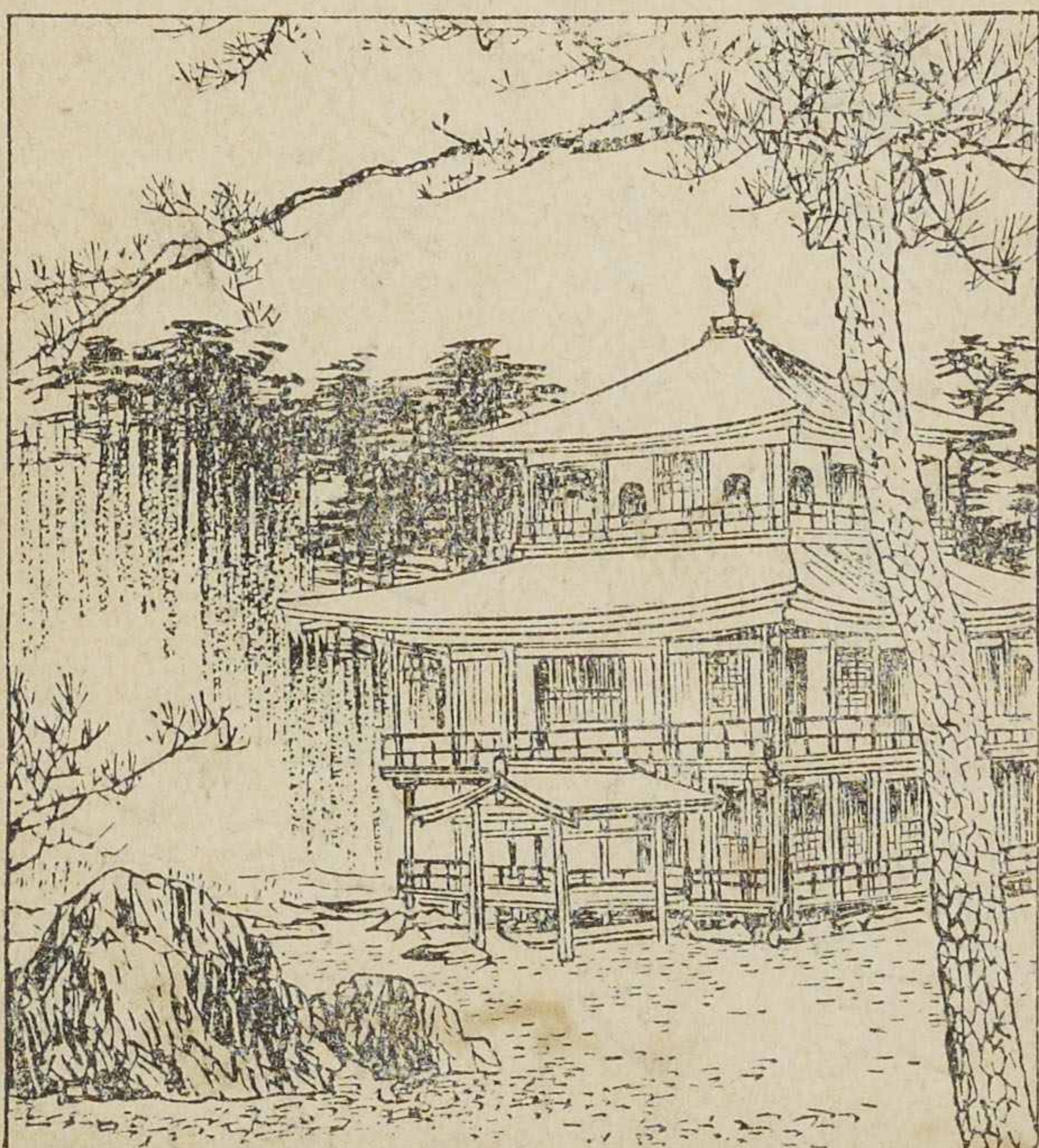
社



寺^ジナドガ名高イ。
 願^{ガン}寺^ジ東^{ヒガシ}本^{ホン}願^{ガン}寺^ジ金^{キン}閣^{カク}寺^ジ銀^{ギン}閣^{カク}
 寺^ジデハ、清^{キヨ}水^{ミヅ}寺^ジ知^チ恩^{オン}院^{イン}西^{ニシ}本^{ホン}

社^{ジャ}ナドガ名高ク

ルイ社^{ヤシロ}ヤ、大^{オホ}キナ寺^ジガ、夕^{ユフ}クサシ、
 アッテ、イツモ、見^{ケン}物^{ブツ}人^{ニン}ノタエルコ
 トガナイ。社^ジデハ、平^{ヘイ}安^{アン}神^{ジン}宮^グ賀^カ茂^モ
 神^{ジン}社^{ジャ}ハ、坂^{サカ}神^{ジン}社^{ジャ}、北^{キタ}野^ノ神^{ジン}社^{ジャ}、豊^{ホー}國^{コク}神^{ジン}



マタ、キョウト京都市ノ近クニハ、タイソトケシキノ
ヨイトコロガアル。ソレハアラシヤマ嵐山トタカヲ高雄トデ
アツテ、アラシヤマ嵐山ハ、サクラ櫻デ、名高ク、タカヲ高雄ハ、モミヂデ、名
高イ。

コノキョウト京都市デ、ニシジン西陣織ヤユーズン友禪ゾメ深ヤキヨミヅ清水ヤキ焼ナ
ドガデキル。

○キョウト京都市ノ近クニハ、ケシキノヨイトコロガアル。
キョウト京都市ノ近クニハ、ケシキノヨキトコロアリ。

織物

絹

羽

○嵐山ハ櫻サクラテ名高ク、高雄ハモミヂミヂテ名高イ。

○嵐山ハ櫻サクラニテ名高ク、高雄ハモミヂミヂニテ名高シ。

第二 織物おりもの。

織物には、絹織きぬおり、木綿織もめんおり、麻織あさおり、毛織けおりなど、いろいろございます。

絹織といふのは、生糸まきいとや練糸ねりいとで織つたもの、ことのでよい着物きものや羽織はおりや帯おびは、たいていこの絹織で、こしらへます。絹織には、羽は二重ふたへ縮ちり

綿

着

緬めんづむぎがいきしゆすはかたしゆちんなどい
ろいろございます。

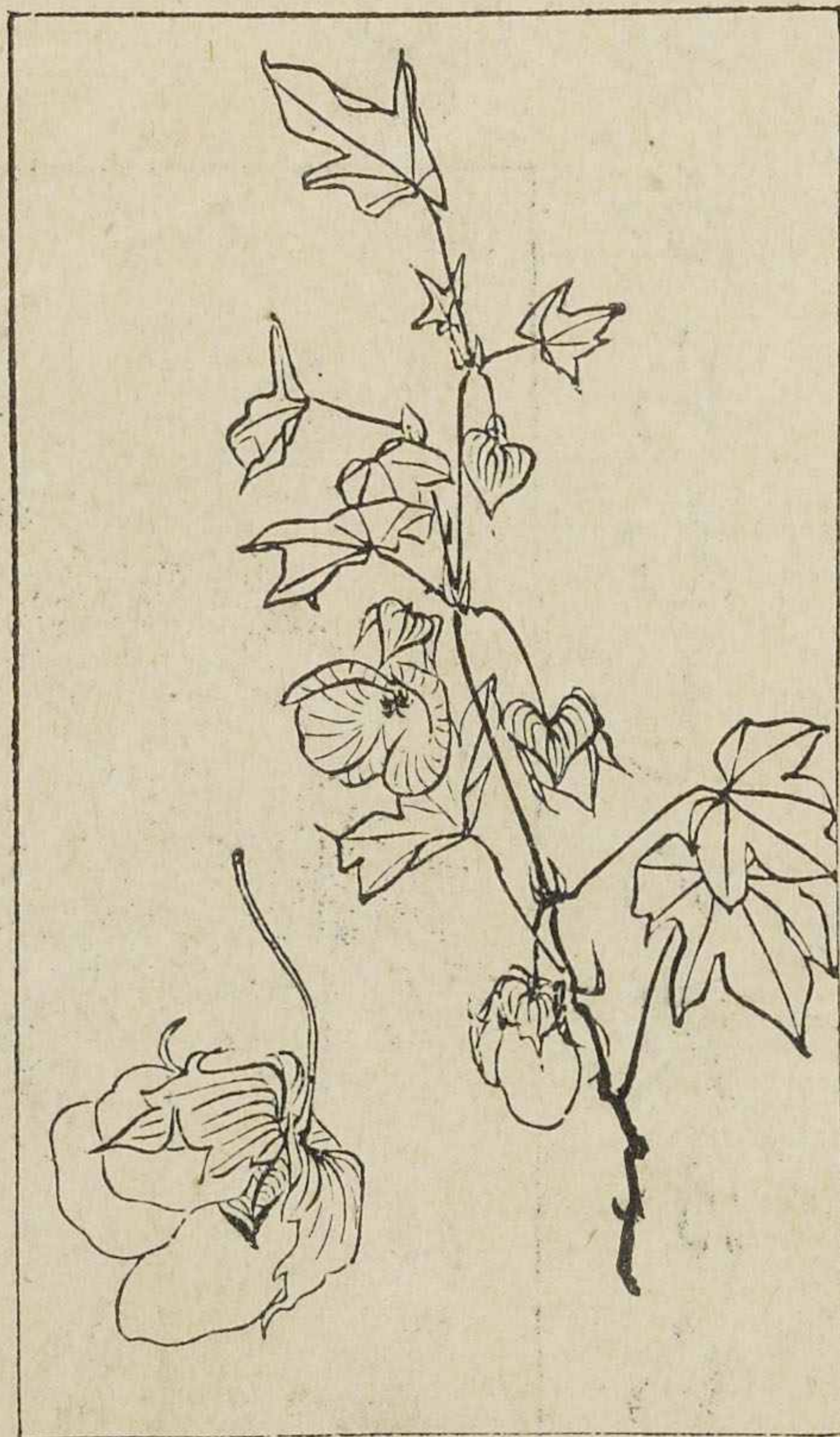
また木綿織もめんおりといふのはきわたの實みの中に

ある綿からとった木綿

糸いとで織つたもののこと

で、みなさんのふだん

着てをる着物や羽織はたいていこの木綿もめん
織おりでこしらへたものでございます。これに

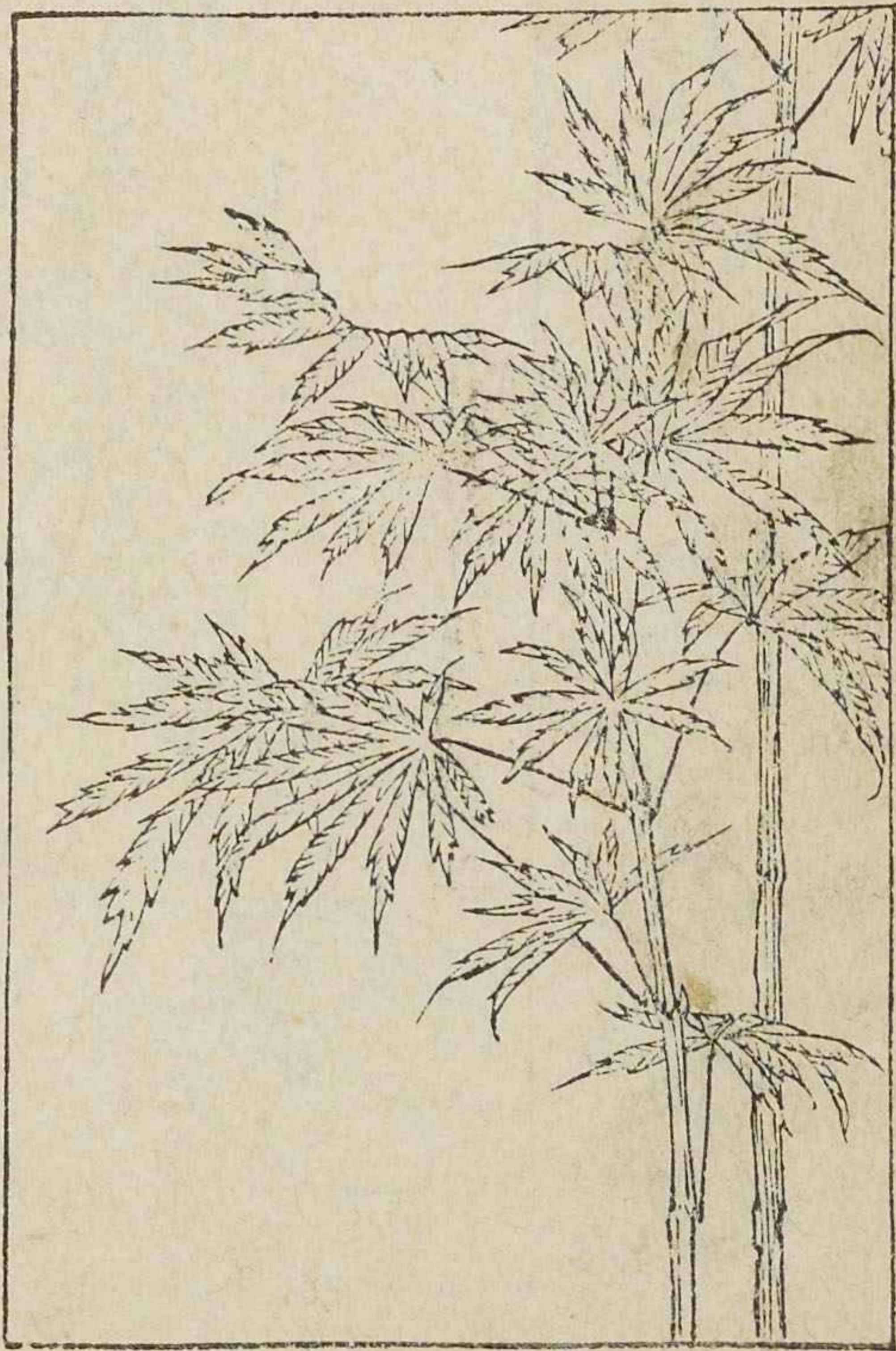
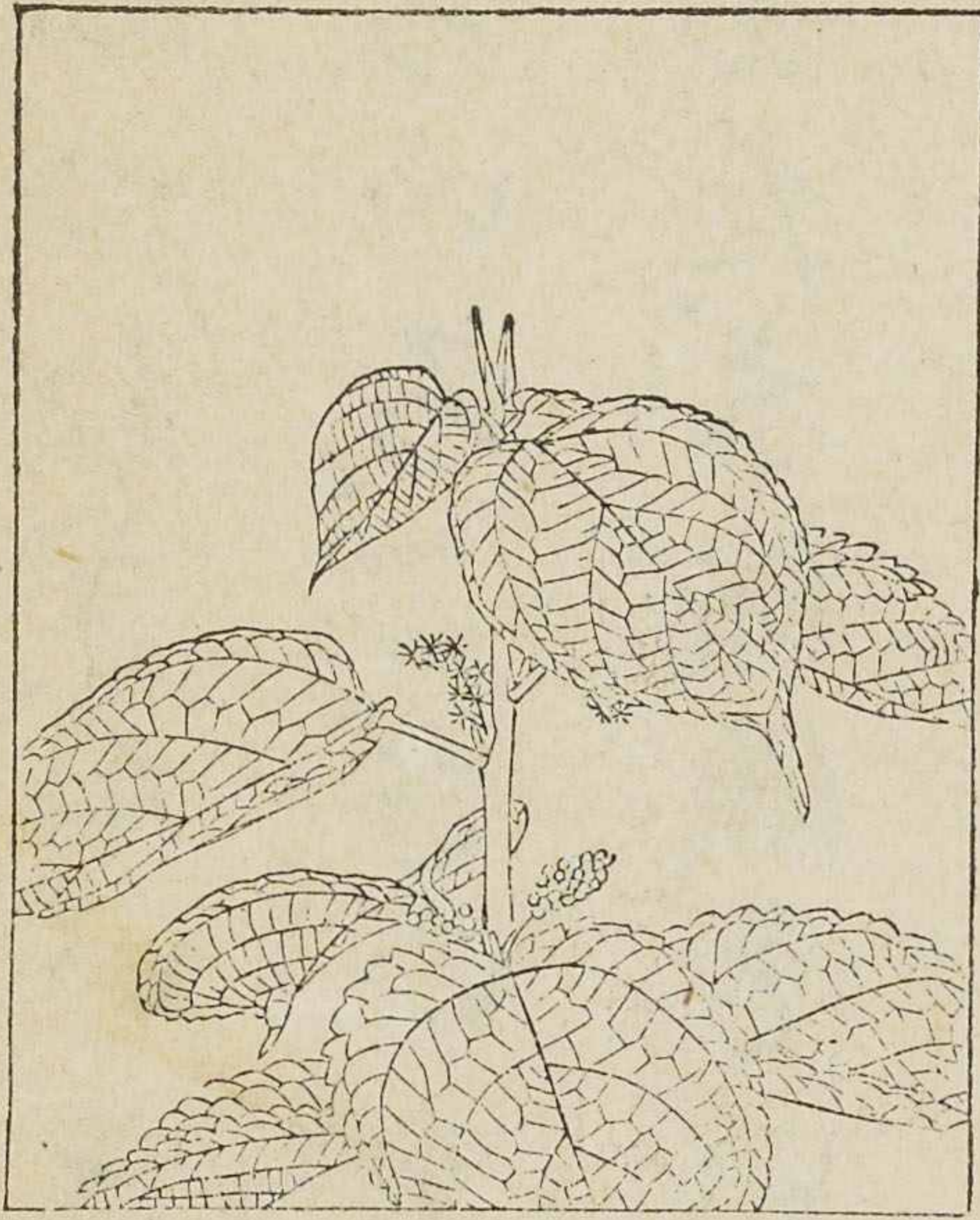


麻

もまをかふたこがすりちぢみかなきんめ
んふらんねるなどいろ
いろございます。

つぎに麻織といふのは

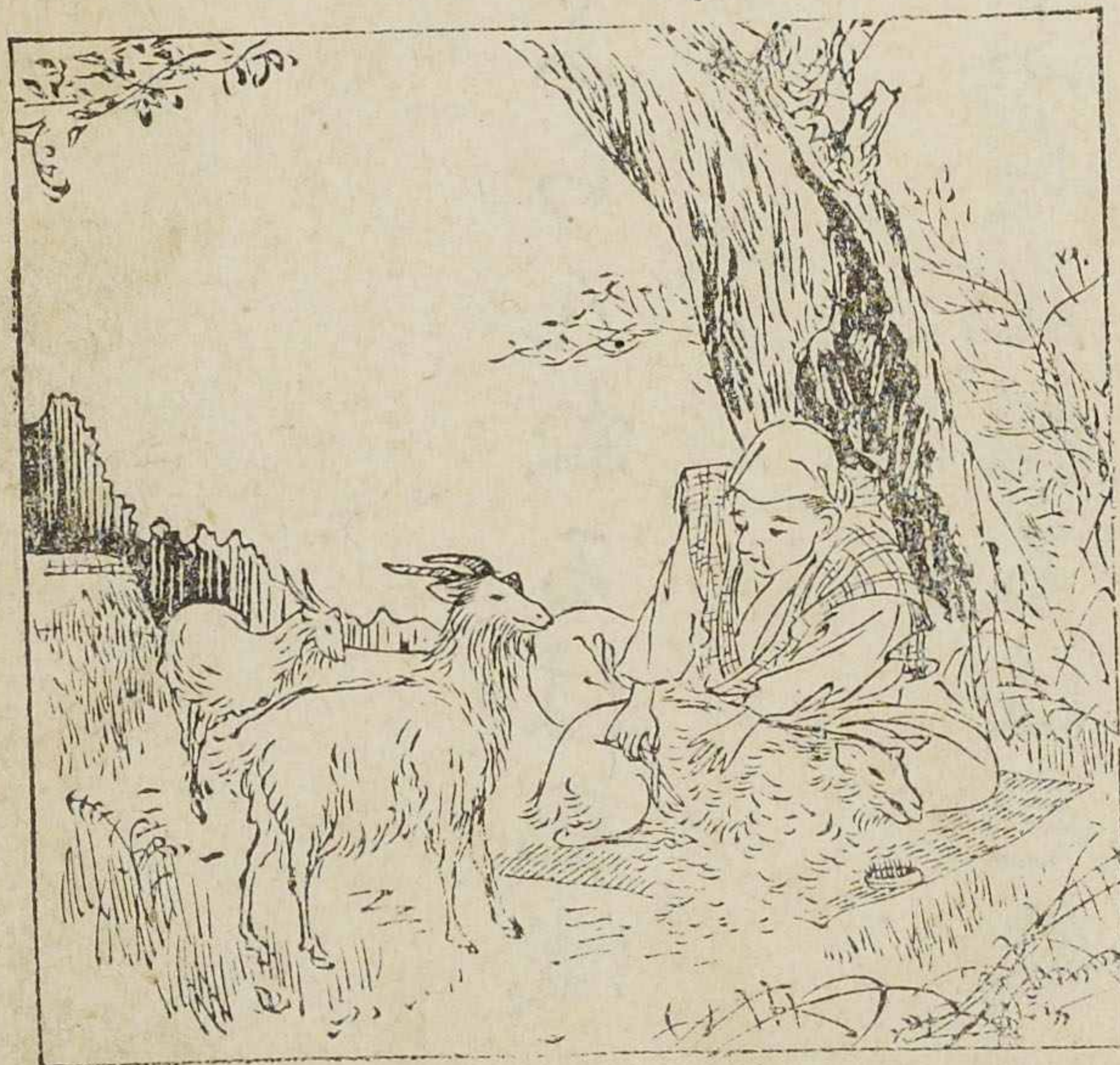
大麻あさの皮かはからとつた糸やからむしの皮かはから



とつた糸で織つたもの
でございます。大麻あさからとつ
た糸で織つたものではかや

などをこしらへ、からむしからと、た糸で織つたものでは、かたびらなどをこしらへます。そして、これには、奈良晒ならざらし、越後縮えちごちぢみ、越後上布えちごじょうふなど、いろいろございます。

それから、また、ふらんねる、らしめりんすなどのよしに、ひつじの毛で織つたものもござい
います。これが毛織といふもののことござ



ざいます。

○めりんすは毛織物である。

めりんすは毛織物なり。

○めんふらんねるは木綿物であつて、めんふらんねるは毛織物である。

めんふらんねるは木綿物にして、めんふらんねるは毛織物なり。

おたくしは、すこしよーじが

ございまして、こんど京都へ、

用

いつてきたいとおもつてをりま
すが、なにか、御用はございま
せんか。あたたくしでできるとこ
となら、どんな御用でも、たし
てまおります。どうぞごえん
りよなく、おっしゃつてください。

十月二十五日

青木一郎

梅田春吉様

代金

圓

お手紙をくださいまして、あ
りがたうございませう。さぞご
めいおくなことだらうとは
おもひますが、どうぞしるち
りめんを、一匹ひきかってきていた
だきたうございませう。ねだん
は、二十圓までのものでよろ
しうございませう。その代金は、

稻

このつかひにもたせてあげ
ましたから、おうけとりくだ
さい。

十月二十六日

梅田春吉

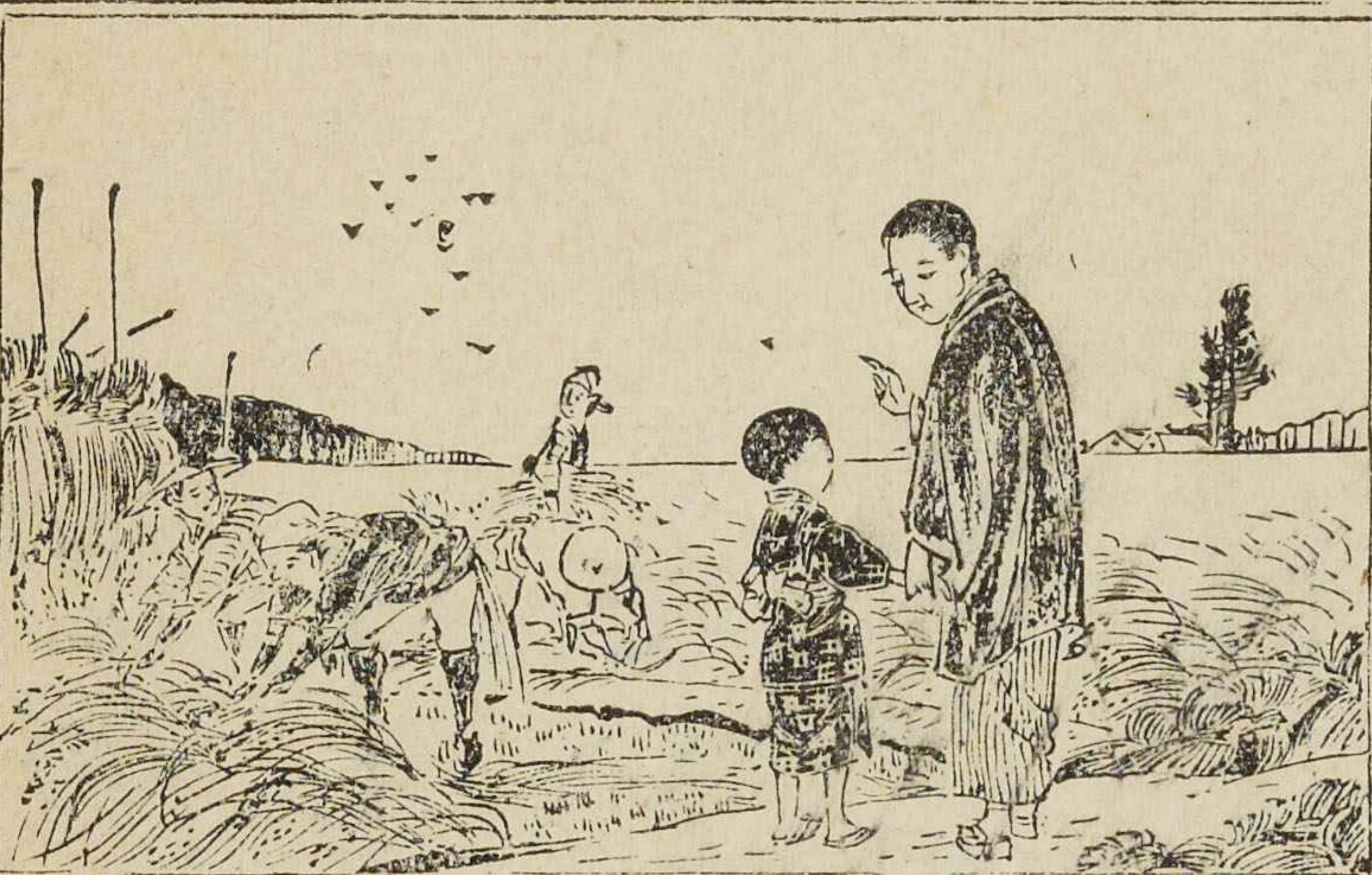
青木一郎様

第三 稻いねかり。

ある日、太郎は、おとうさんと、町はづれの田
のそばを通った。田にはもう、稲がみのつて、きい

ろくなつておた。そして、あちでもこちでもい
そがしさらに、それをかっておた。

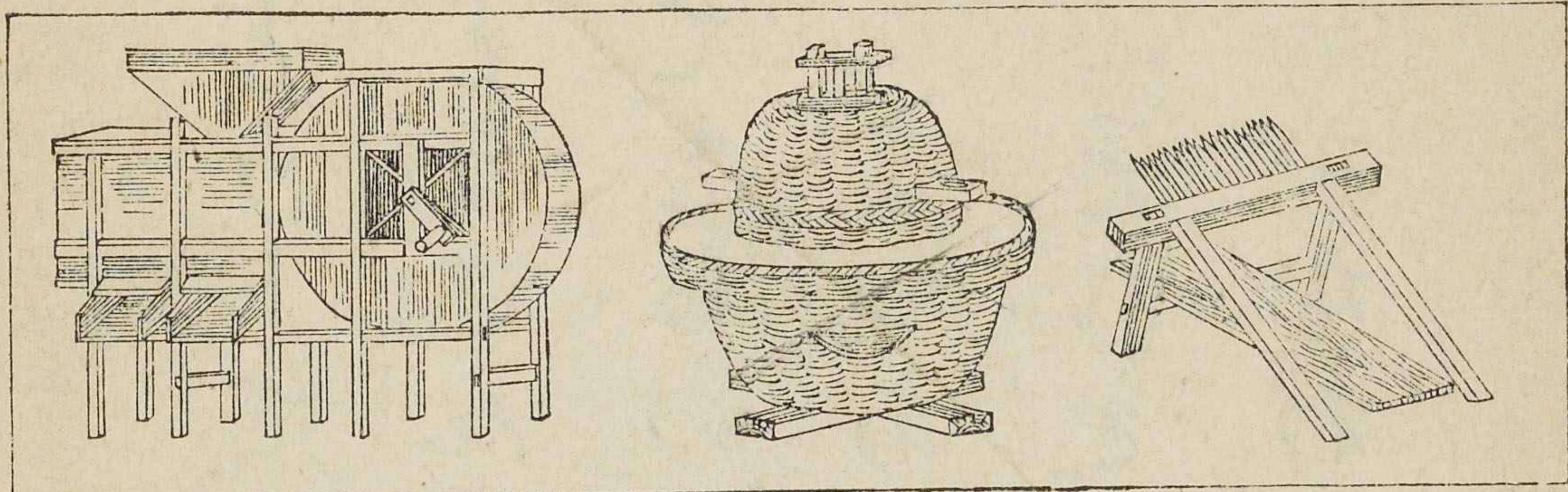
太郎はしばらくめづらしさらに見ておた



がやがて、「おとうさん。あの人が
あは、稻をかって、どうするのです
か。」とたづねた。おとうさんは「稻
をかって、それから、米をとるので
す。」とこたへた。

太郎はまた、「おとうさん。稲をかって、それから、
どうして、米をとるのですか。」とたづねた。お
とうさんは、「それはなかなか、てかずをかけ
て、とるのです。」と、いつて、次のよゝに、話した。

「まづ、あの人たちのよゝにして、稲をかって、
それを、日に、かわかします。そして、その稲
がかわいた時に、いねこきといふもので、
そのみをこきおとします。このみをもみ



といひます。

それから、このもみをすりうす
といふもので、ひいてもみがら
をとると、米になります。しかし、
すりうすで、ひいたばかりでは、
まだ、米にもみがらがまじって、お
たりぬかがついて、おたりしま
すから、また、とーみといふもの

であふたりうすでついたりします。さう
するとはじめてわたくしどものため
米になるのです。

太郎はこの時から米をとるにはたいそし、
てかずのかかるものだ。といふことを知った。
そして米はひとつぶでもそまつにしては
ならんものだ。とおもった。

○田のそばを通った。

田のそばを通りたり。

田のそばを通れり。

○稲のかわいたときに、そのみをいねこきといふもので、こきおとす。

稲のかわきたるときに、そのみをいねこきといふものにて、こきおとす。

稲のかわけるときに、そのみをいねこきといふものにて、こきおとす。

第四

鎌倉カマクラ。

キョート

フルイ社ヤ、寺ガアツテ、名高イノハ、キョート京都市ト
 奈良市トナラデアアル。キョート京都市ト奈良市トノヨ
 ニ、フルクハナイガ、社ヤ寺ガアリ、奈良市ノ
 ヨーニ、ダイブツ大佛モアツテ、名高イノハ、カマクラ鎌倉デアアル。
カマクラ鎌倉ハ、三方トモ、山ニトリマカレテ、ツテ一
 方ハ、海ニツヅイテヨル。アマリ、ヒロイトコ
 ロデハナイガ、ムカシ、ミナモトノヨリトモ源頼朝トイフ、タイシヨウ大將ガ
 ヲツテカラ、二百五十年ホドノ間ハズイブン、

兄 今

ニギヤカデアツタ。三ナモトノヨリトモ源頼朝ハ今カラ七百年ホ

ド前ノ人デ、三ナモトノヨシツネ源義經ノ兄デアル。

コノコロ、タヒラノキヨモリ平清盛トイフ人ナドガアツテ、タイ

ソ、ワガママヲシテヲツタノデ、オカミデモ、

タイソ、コマツテヰラツシヤツタ。ソコデ、ヨリトモ頼朝ハイ

クサヲオコシタ。ソシテ、ヨシツネ弟ノ義經ナドニセ

メサセテ、ト、ト、ト、ヘイシ平氏ヲホロボシテシマツ

タ。ヨリトモ頼朝ハ、コノコロカラ、日本中ノブシ武士ノカ

弟

國

シラトナツタ。

頼朝ヨリトモが死シンデカラ、マモナク、ソノアトハ、タ

エタガ、北條ホージョーシ氏が、ヒキツヅイテ、コ

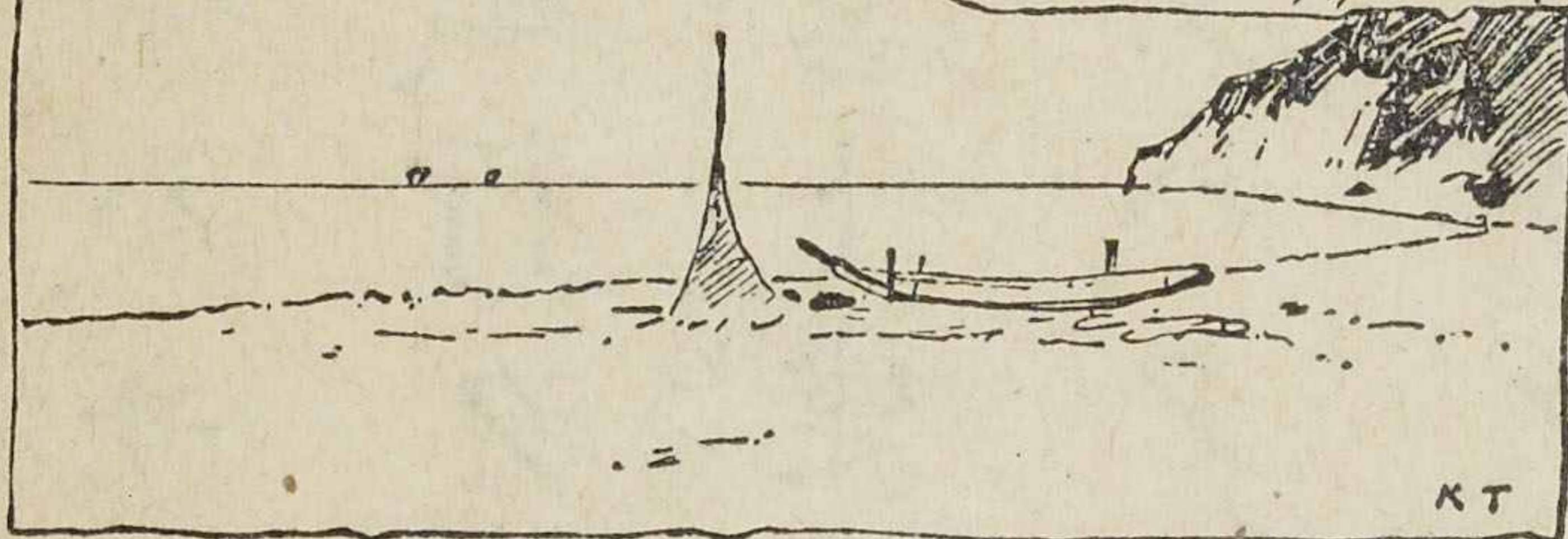
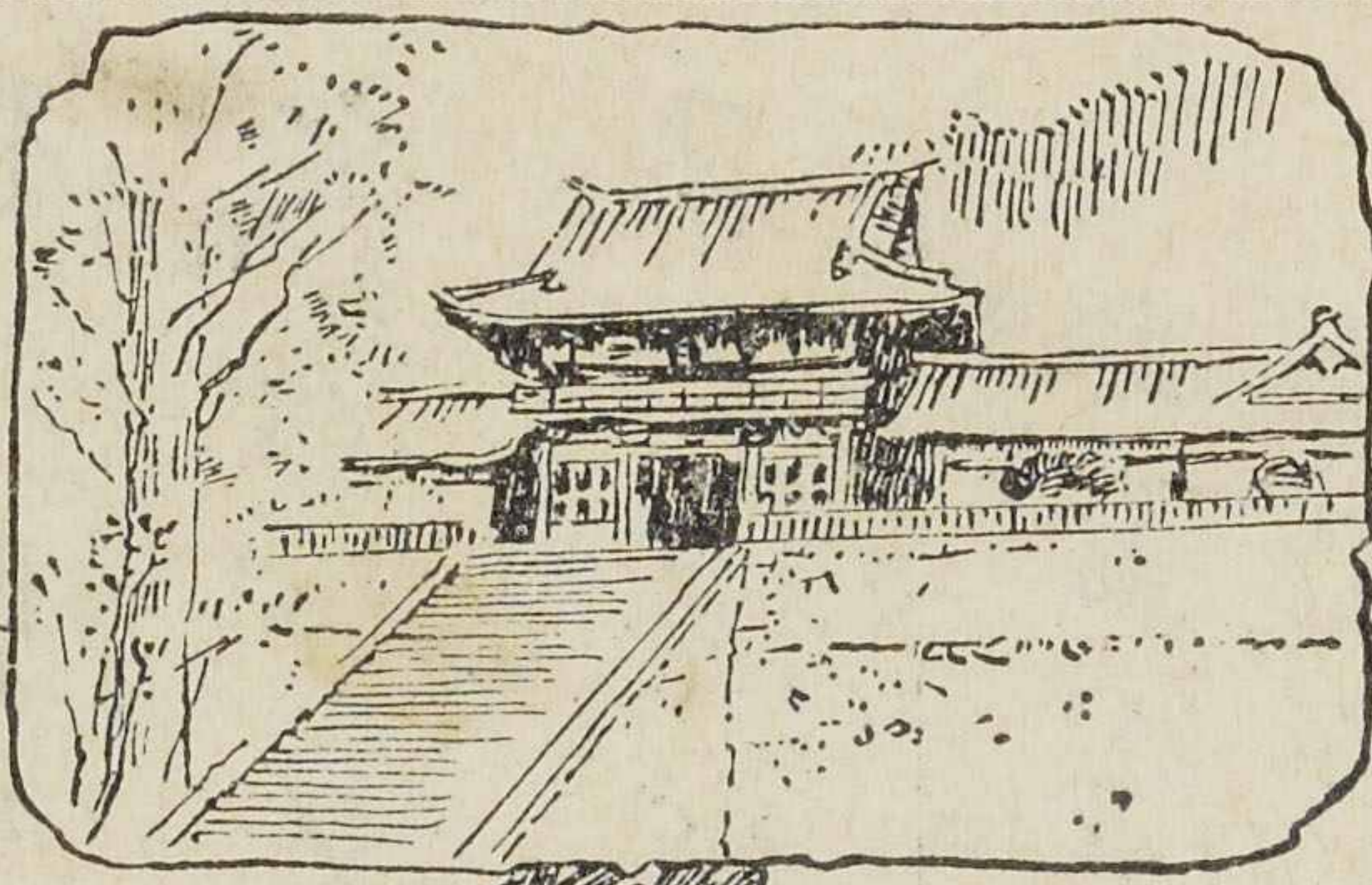
ノ鎌倉カマクラニ、ヲツタ。コノ北條ホージョーシ氏ノ、

時宗トキムネトイフ人ノ時ニ、元ゲントイ

フ國カラ、ワガ國ニ、セメテキ

タ。元寇ゲンコウトイッテ、名高イノハ、コ

ノコトヲイフノデアル。



鎌倉カマクラハ、今ハ、サビシイトコロニナッテヲルガ、

アソビニ、行ク人が、タクサン、アル。ココノ鶴ツルガ

岡八幡宮ヲカハチマングート建長寺ケンチョージトハ、タイソ一、名高イ。マ

タ、海バタハ、タイソ一、ゲシキガヨイ。大佛ダイブツハ、

コノ海バタノ近クニ、アル。

○鎌倉カマクラハ、二百五十年ホドノ間ハ、ニギヤカデアッタ。

鎌倉カマクラハ、二百五十年ホドノ間ハ、ニギヤカナリキ。

○鎌倉カマクラハ、ムカシハ、ニギヤカデアッタガ、今ハ、サビシイ

トコロニナッテヲル。

行

鎌倉カマクラハ、ムカシハ、ニギヤカナリシガ、今ハ、サビシキト
コロニナリタリ。

鎌倉カマクラハ、ムカシハ、ニギヤカナリシカドモ、今ハ、サビシ
キトコロニナリタリ。

○鎌倉カマクラハ、今ハ、サビシイトコロニナッテラルガ、アソビニ、
行ク人が、タクサンアル。

鎌倉カマクラハ、今ハ、サビシキトコロニナリタレドモ、アソビ
ニ、行ク人〇オホシ。

第五 元寇げんこ。

今からむかし、六百年、

萬

子|男

風

ころは弘安四年の夏、

元の國からわが國に、

よせたるてきは十餘萬。

わが日本の武士は、みな、

「おのれにくき元軍め。」

日本男子のうで見よ。」と、

すすんでてきをやぶりたり。」

このとき、大風ふきあれて、

なみは、山より、まだ高く、

てっかん、四千、くつつが、つり、

こはれて、海にしづみたり。」

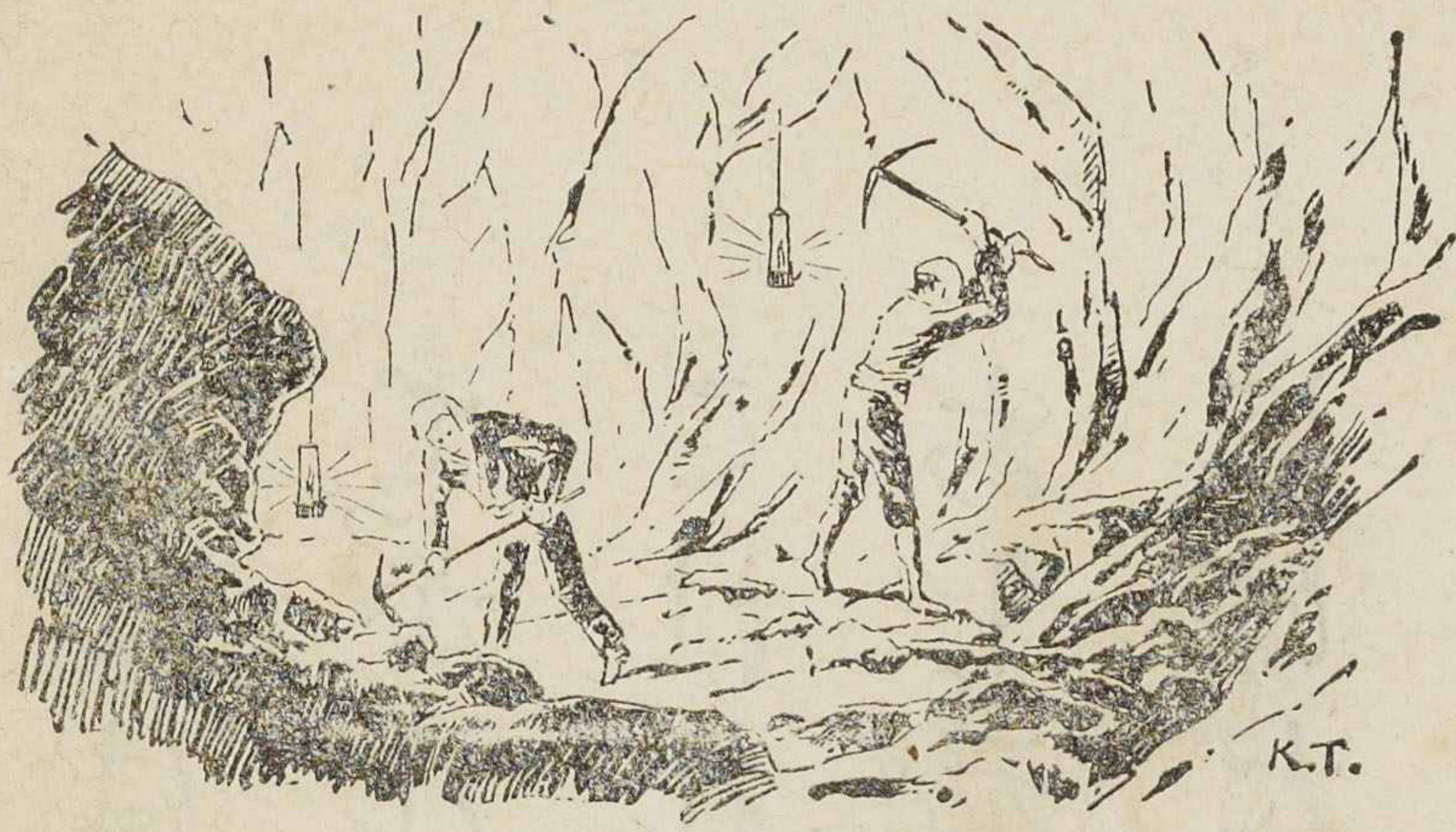
あし。元軍げんぐんの十餘よ萬、

にげたるものは、わづかにて、

あとは、のこらず、わが國の

海にしづみてしまひたり。」

炭黒



○海にしづんでしまった。

海にしづみてしまひたり。

第六

石炭セキタント石油セキユ。

石炭セキタンハ、オホムカシニ、ハエテヲッ

タ木ガ、土ノ中ニ、ウヅマツテ、デキ

タモノデアル。

石炭セキタンハ、色が黒クテ、炭ニニテヲ

ルガ、炭ヨリモ、タイソー、カタク

石炭

テ、火ノカガ、ズット、ツヨイ。ソレダカラ、ジョーキ
ヲコシラヘテ、汽車ヤ汽船ヤ、工場ノ重イ機
械ナドヲ動カスニハ、コノ石炭ヲタクノガ、
イチバン、ヨイ。

汽車ヤ汽船ヤ工場ナドノエントツカラエデ
ル、黒イケムリハ、タイテイ、石炭ノケムリデ
アル。

シアハセニモ、石炭ハ、ワガ國カラ、タクサン、

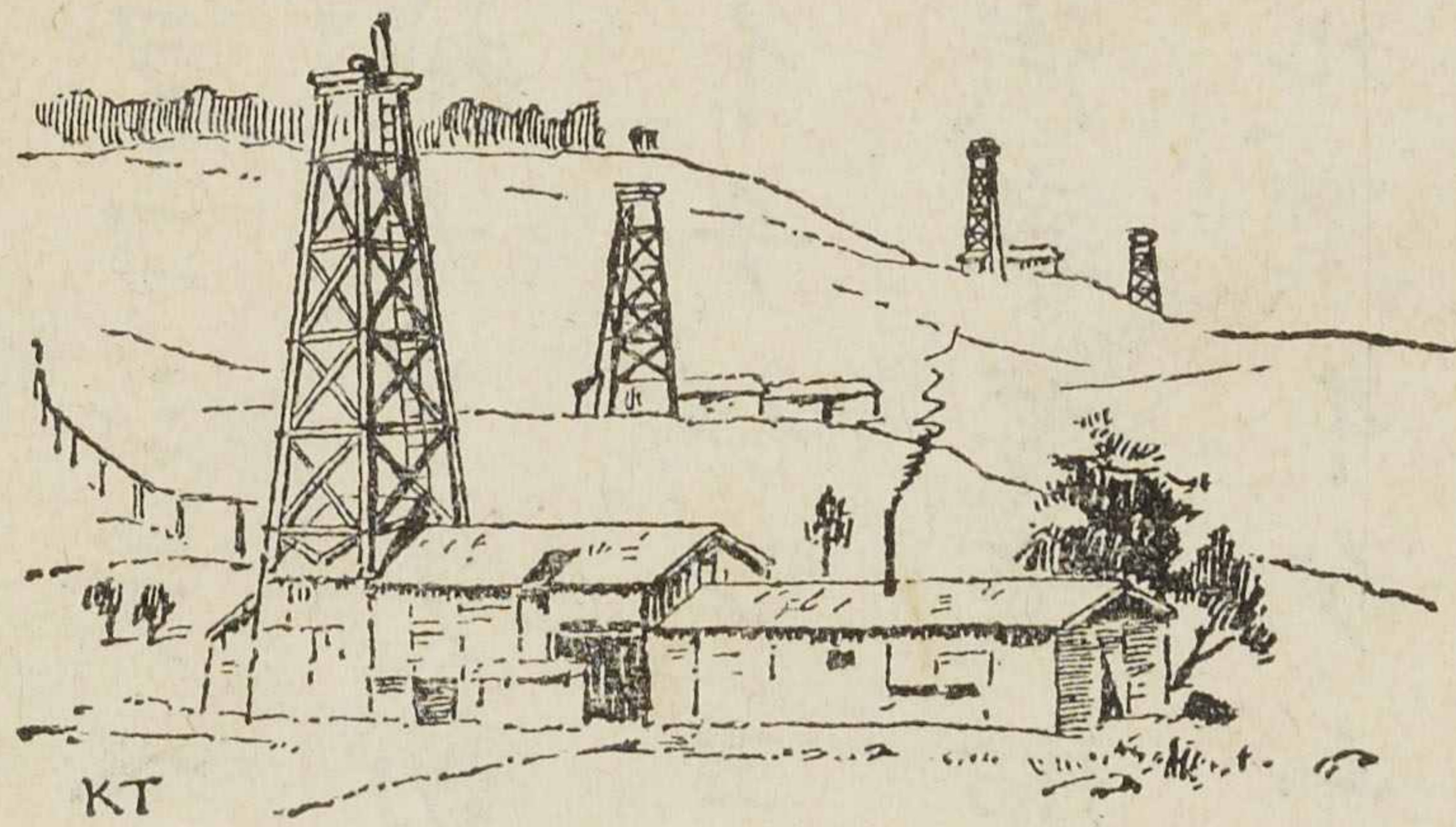
外國賣

油

石油

出ルカラ、外國へモ、賣リ出ス。

石油^{セキユ}モ、ヤッパリ、土ノ中ニ、アルモノデアアル。ハ



KT

ジメハ、色がコクテ、ドロドロシ
 テヲルガ、イロイロ、テカズヲカ
 ケルト、スキトホッダ油ニナル。ラ
 ンプニツカフノハ、コノ油デア
 ル。

石油ハ、ワガ國カラモ、出ルガ、ソレダケデアハ、

買

タランカラ、外國カラモ、買ヒ入レル。

○石炭ハ、ワガ國カラ、タクサン、出ルカラ、外國ヘモ、賣リ出ス。

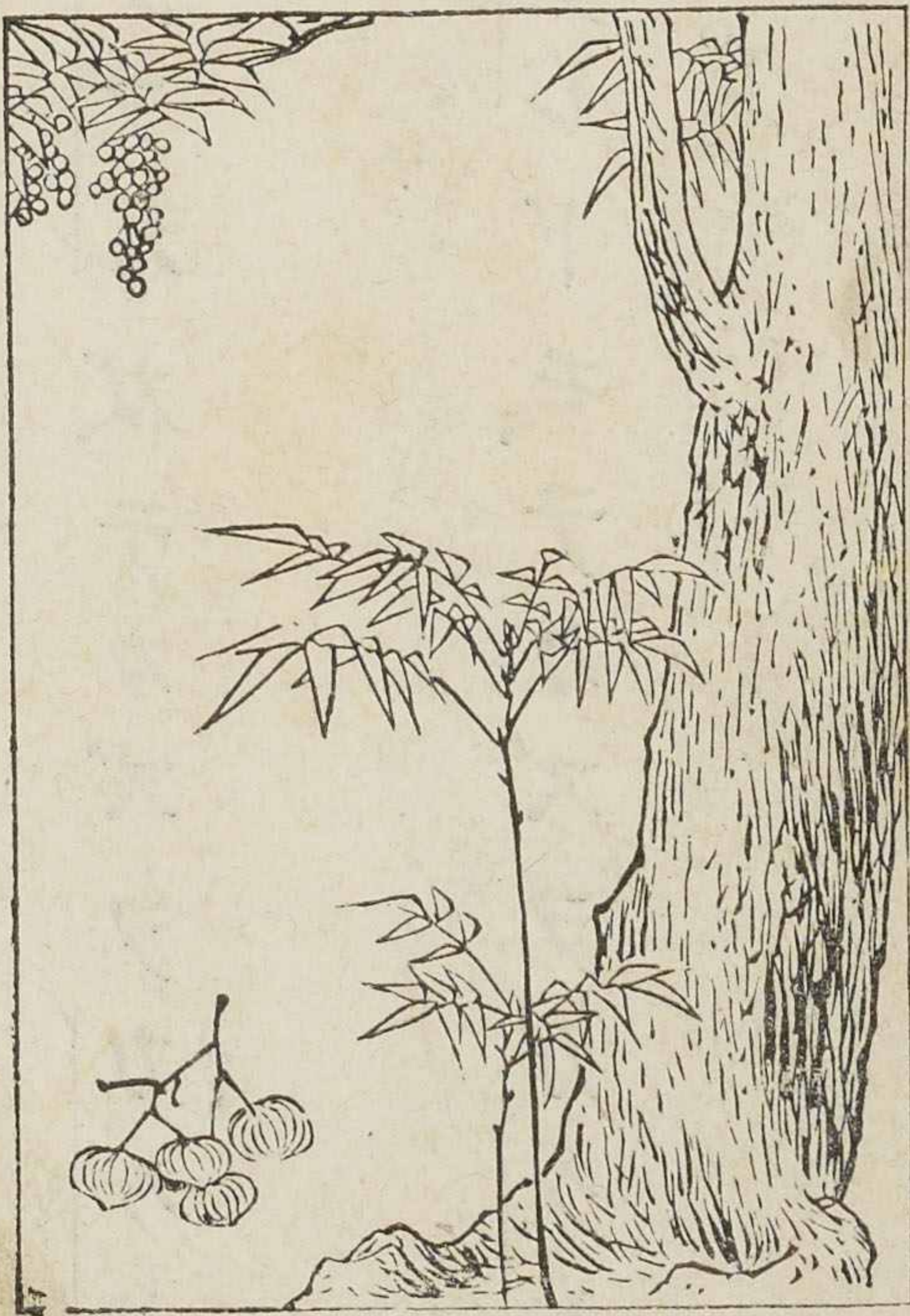
石炭ハ、ワガ國ヨリ、オホク出ヅレバ、外國ヘモ、賣リ出ス。

○石油ハ、ハジメハ、色がツイテ、アルガ、テカズヲカケルト、スキトホッダ油ニナル。

石油ハ、ハジメハ、色〇ツキタレドモ、テカズヲカクレバ、スキトホリタル油ニナル。

第七 ろーそくの話。

わたくしは今はろーそくにあってをります
がもとははぜの木のみ
でございました。そのと
きに人にとられてろー



といふものにせられ、それから、こゝろにほ
そながくて、しんのあるものにせられまし
た。

わたくしどもは、夜になると、しんに火をと

もされて、あかりになります。このあかりに
なるのが、わたくしどものやくめでござい
ます。

わたくしどものできん前には、松の木がた
かれて、あかりになってをりました。また、海ば
たでは、魚の油なども、もされて、あかりに
なつてをりました。しかし、この松の木や魚の
油は、不便ふべんであつたり、くらかつたりして、人がこ

まつてをりました。

そこへ、種油たねあぶらといふものができました。つづ

いて、おたくしどももできました。種油たねあぶらは、あ

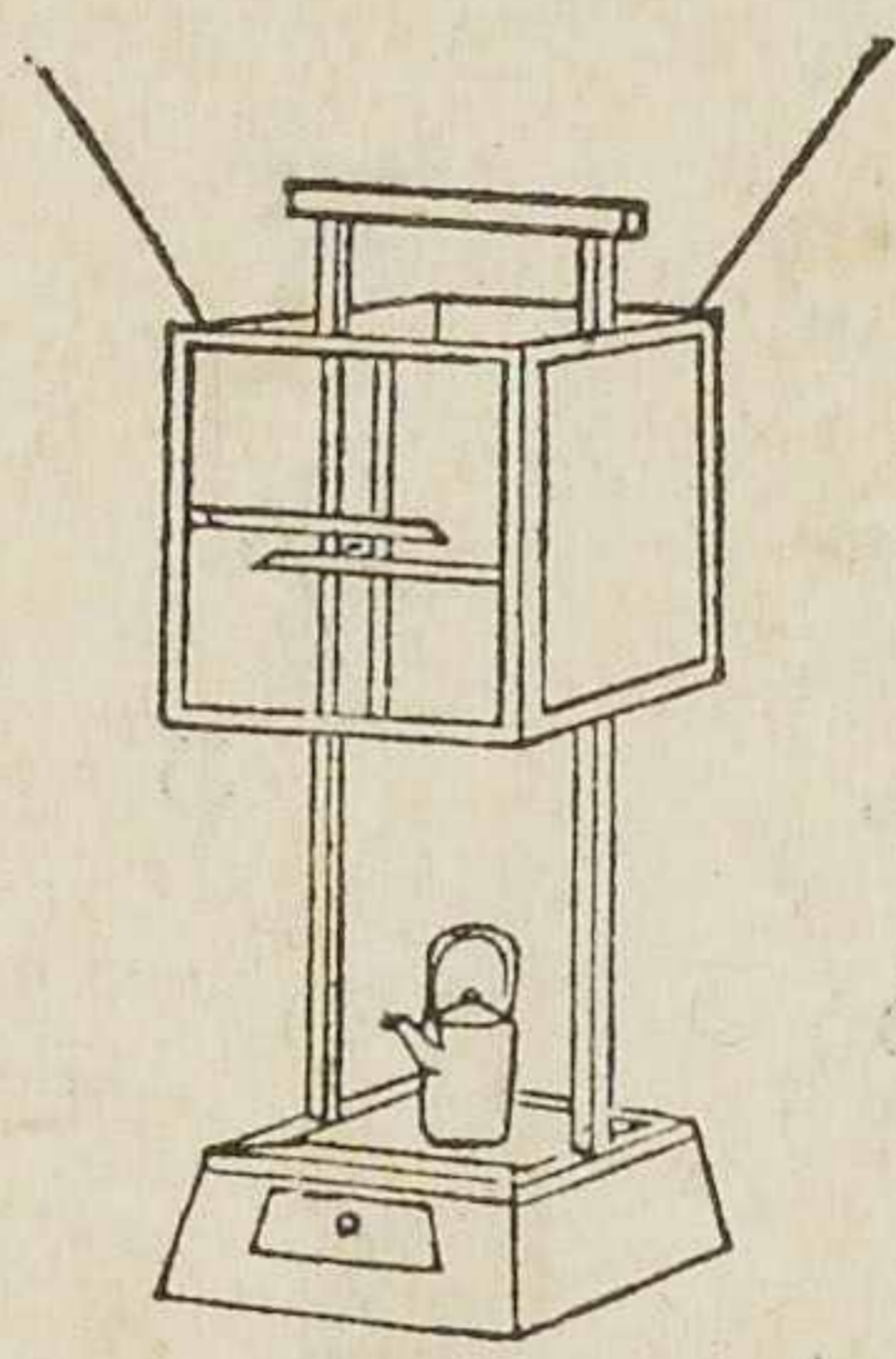
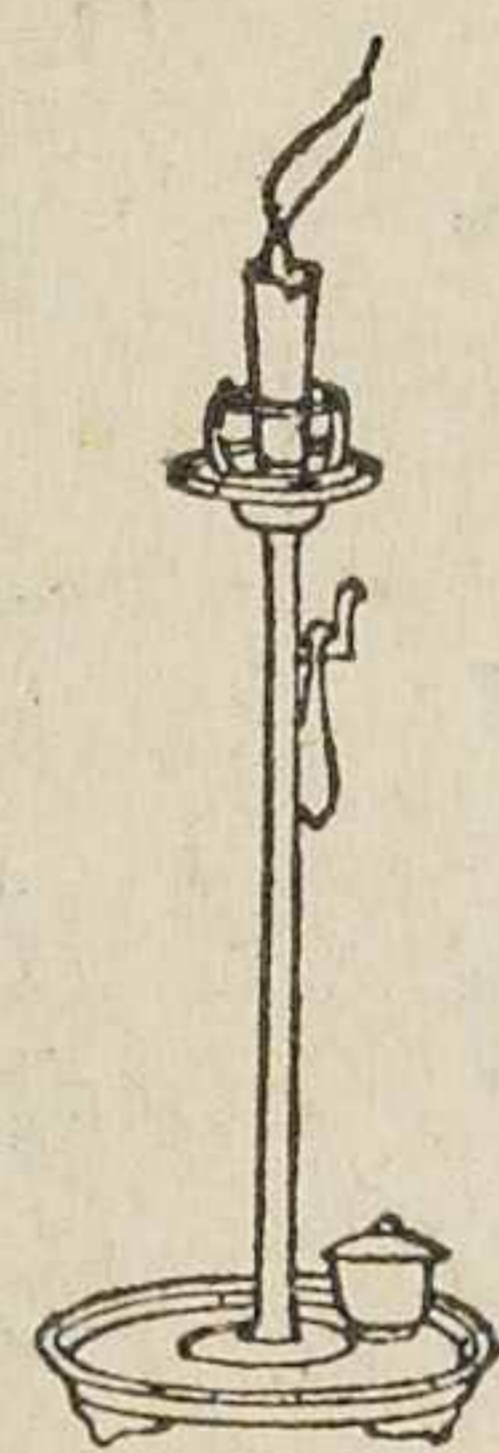
んどんの中で、ともされ、おたくし

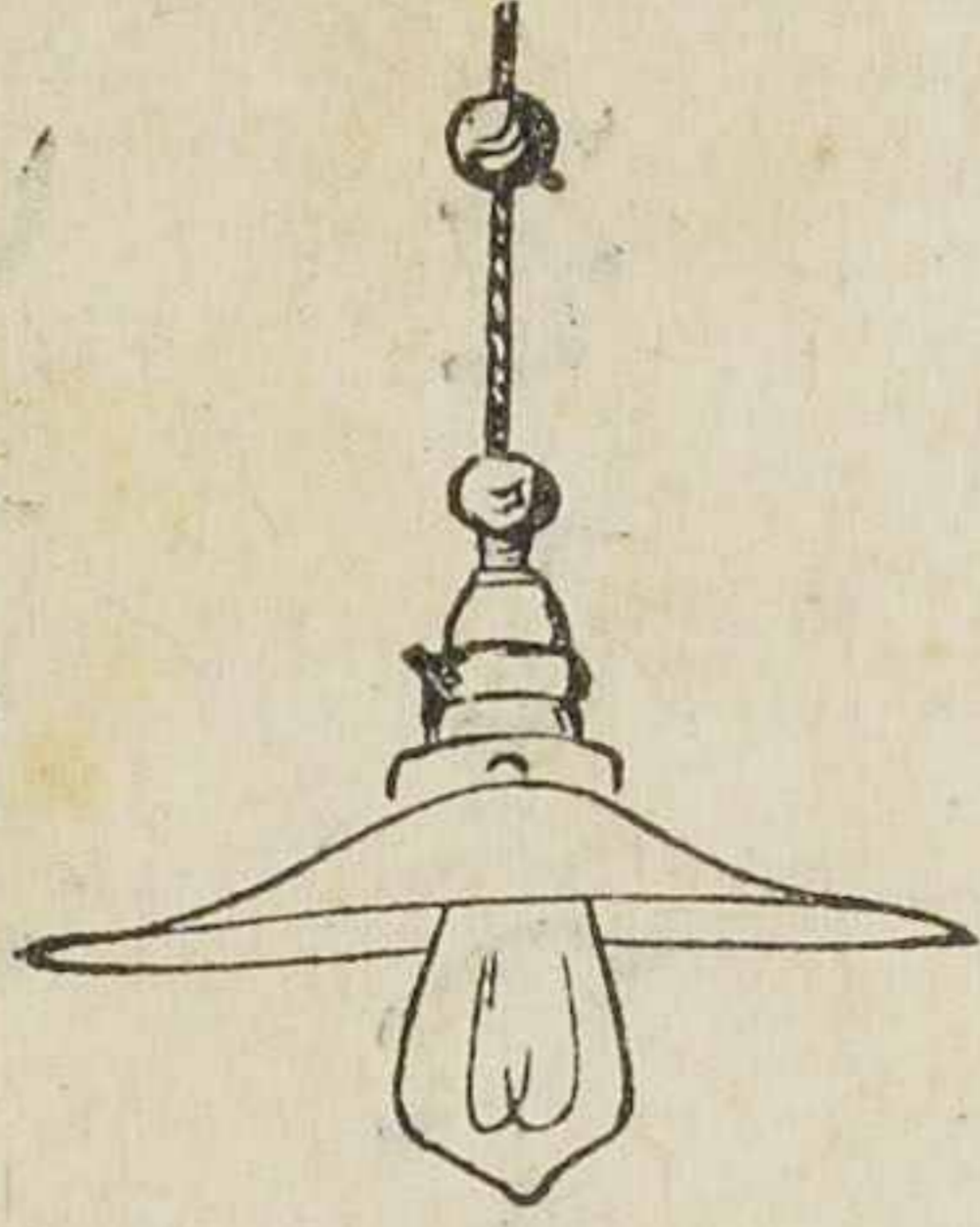
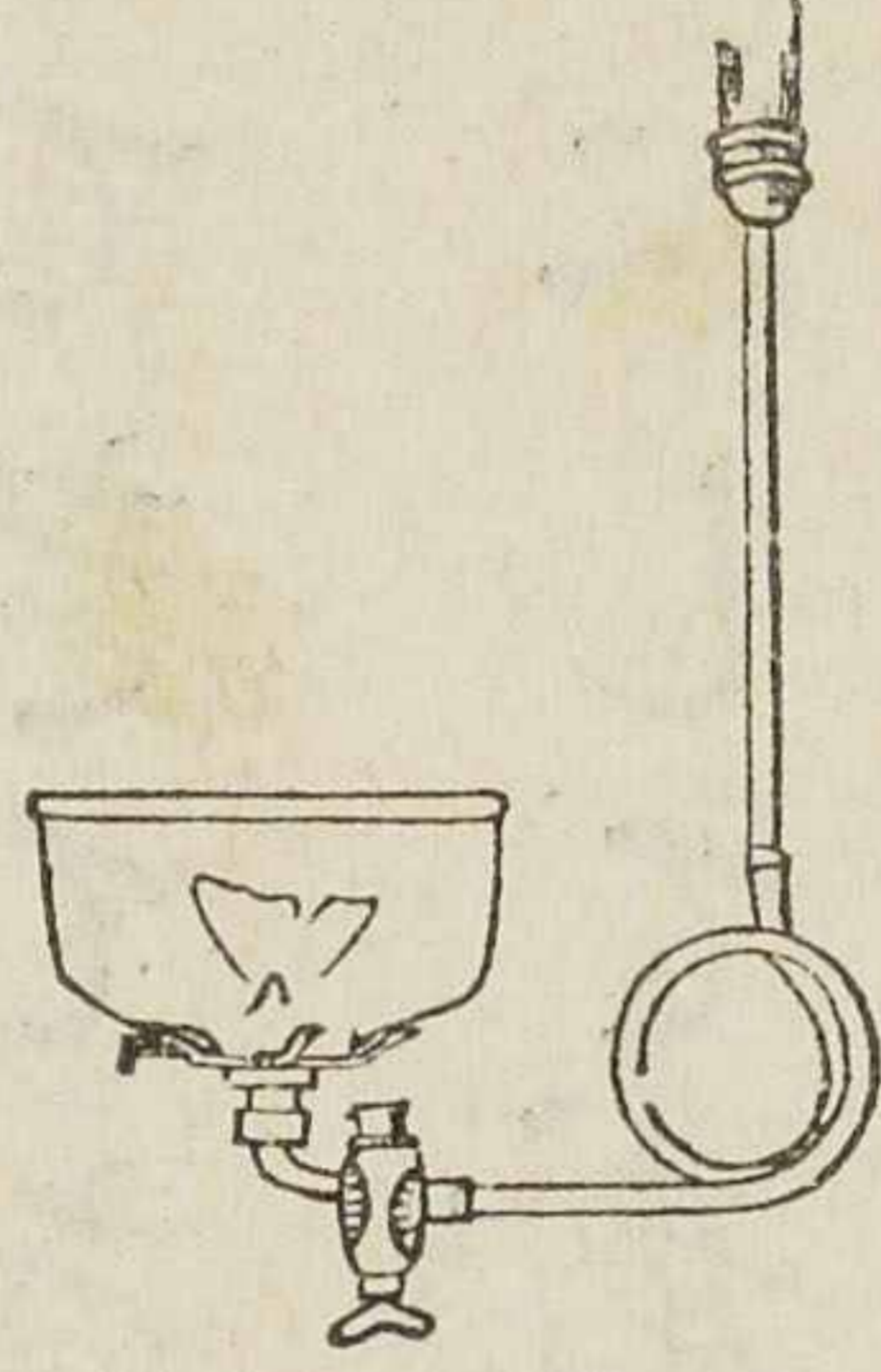
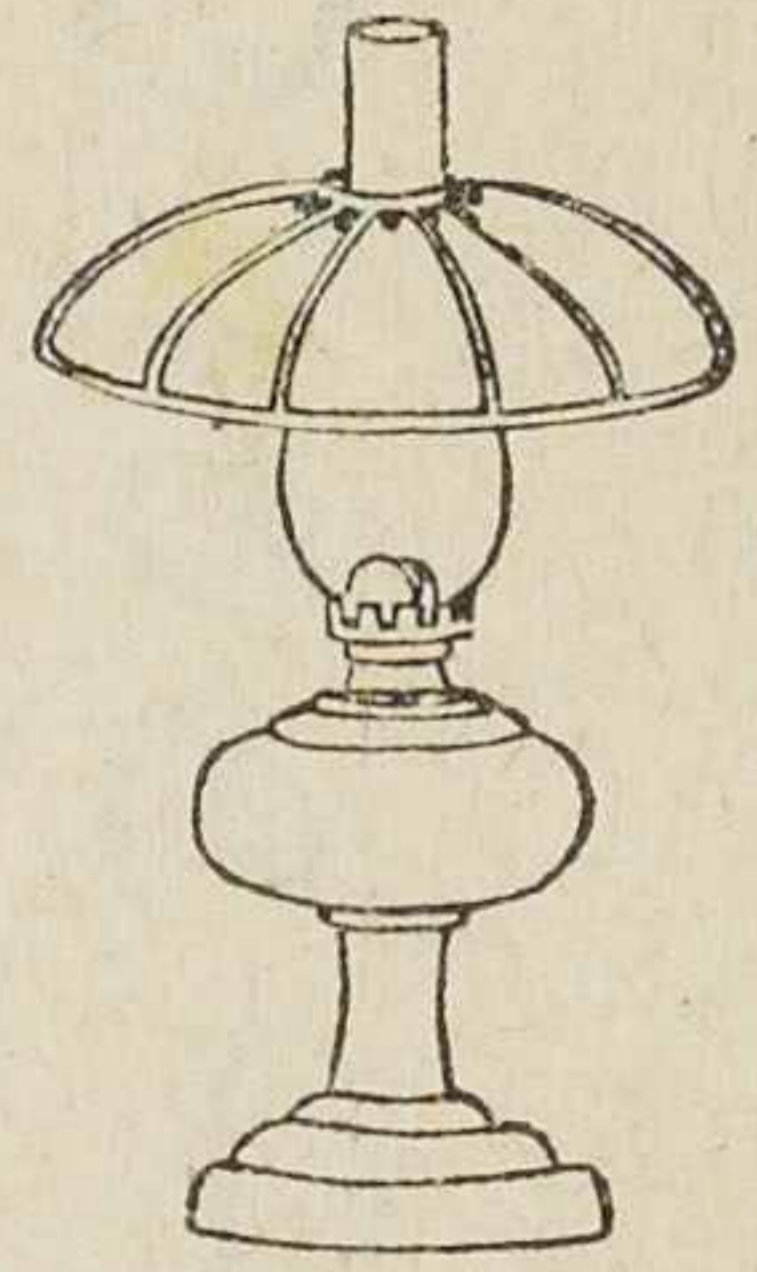
どもは、しよくだいの上や、ちよーちん

の中で、ともされて、「ちよーほーなも

のができた」といはれてをりまし

た。そして、あかりといへば、この種たね





油あぶらとわたくしどもとでもちきつて
をりました。

そのうちに石油といふものもく
みだされ、それをとすらんふと
いふものも外國からわたってきま
した。石油をこのらんふでともし
ますと、種たね油あぶらやわたくしどもをと
もしたよりは、ずっとあかるうござい

います。

そこへ、また、瓦斯がす燈とーといふものができてき
ました。つづいて、また、電氣でんき燈とーといふものも
できてきました。瓦斯がす燈とーは、石炭をむしやき
にして、瓦斯がすといふものをとって、それをとも
したものでございます。また、電氣でんき燈とーは、いろ
いろのしかけをして、電氣でんきといふものをお
こして、それで、あかりを出すものでござい

ます。この電氣燈は、瓦斯燈よりもずっとあか
るうございます。

かういふあかるいものがだんだんできて
きましたので、わたくしどもや種油たねあぶらは、あま
りつかはれんよーになりました。しかし、も
ちあるきのできるのは、らんぷとわたくし
どもとだけでございますから、わたくしど
もは、まだちよーちんの中に、ともされて、みち

をあるく人のあんないをします。

○今は松の木をたいて、あかりにはせん。

今は、松の木をたきて、あかりにはせず。

○人があまり種油たねあぶらをつかはんよーになった。

人があまり種油たねあぶらをつかはざるよーになりたり。

人があまり種油たねあぶらをつかはぬよーになれり。

○電気燈でんきとうなどは、もちほこびができんから、わたくしど

もは、まだ人につかはれる。

電気燈でんきとうなどは、もちほこびのできざれば、わたくしど

もは、なほ人につかはる。

もはなほ人にかはる

電氣燈などはもちほこび。できねばわたくしども
はなほ人にかはる。

第八 大坂市。

ワガ日本二三ツノ大キナ都會ガアル。一ツ

ハ東京市デ一ツハ京都市イマ一ツハ大坂

市デアアル。

大坂市ハ大坂灣トイフ入海ノフチニアッテ、

京都市カラハ十里ホド西南ニアアル。京都市

南里

掘 品 便利

カラ、汽車ニノッテ行クト、一時間バカリデ、着ク。

大坂市オホサカノ中ニハ、大キナ掘ガ、イクスデモ、通ッ

テヲル。ソレダカラ、舟デ、品物ヲハコブニハ、

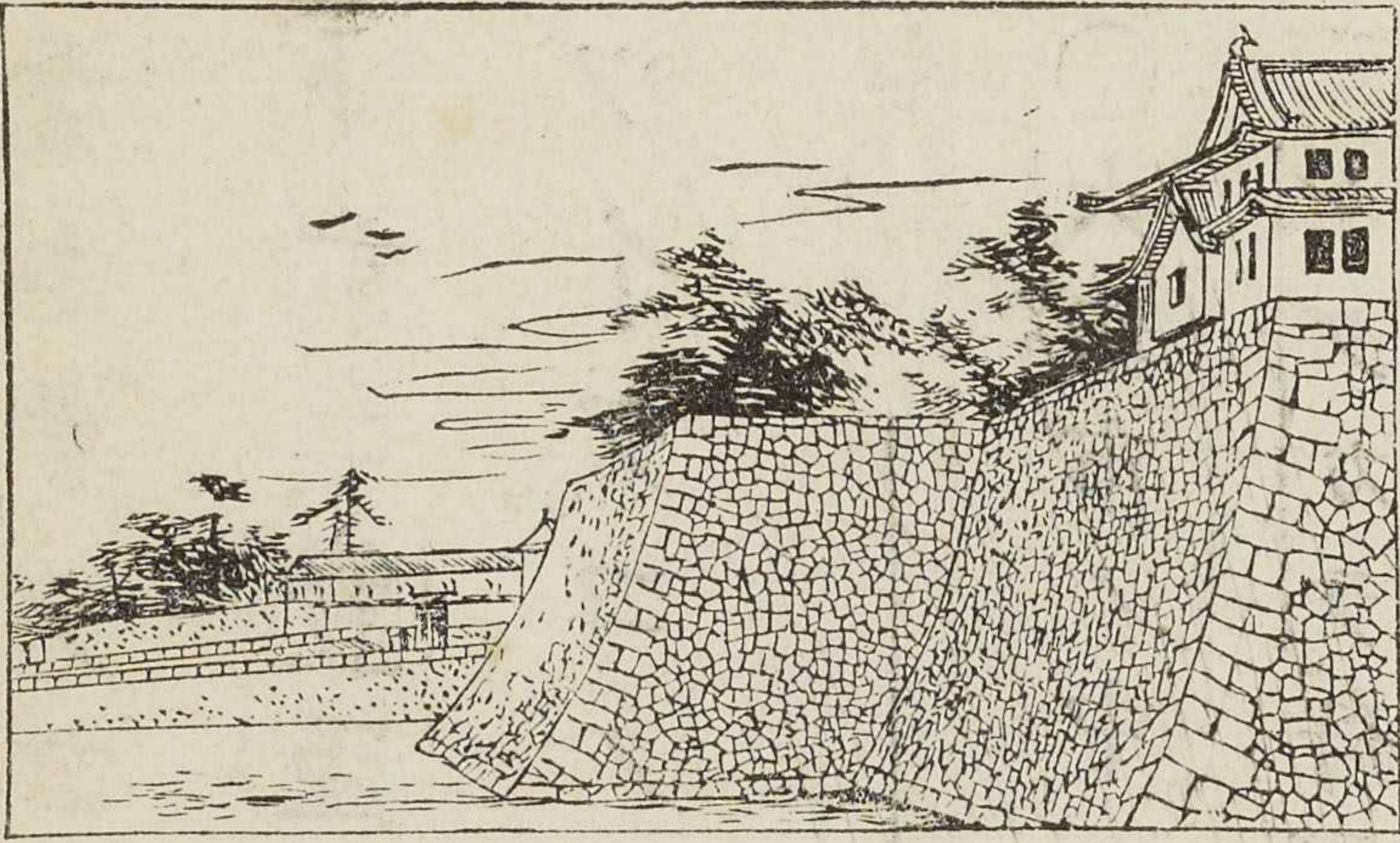
タイソ一、便利デアル。

大坂市オホサカハ、商業シヨギョノ、タイソ一、サカンナトコロ

デアル。外國カラ、品物ヲ、タクサン、買ヒ入レ

モスルシ、マダ、ワガ國ノ品物ヲ、タクサン、賣

昔



リ出シモスル。

マタ、工業^{コウギョウ}モ、タイソ^{タイソ}ー、サカンナトコロ^{サカンナトコロ}デ、木^キ

綿^{ワタ}糸^{イト}ヲコシラヘル工場^{コウバウ}ヤ、マツチナドヲコシ

ラヘル工場^{コウバウ}ガ、タクサン、アル。ソ

シテ、ソノ工場^{コウバウ}ノエントツカラ

ハ、イツモ、石炭ノケムリガ出テ

ヲル。

大坂^{オホサカ}市^シニハ、昔^{シノ}仁徳^{ニトク}天皇^{テンノウ}ノオイ

デニナツタコトガアル。マタ、今カラ、三百年ホ
ド前ニ、トヨトミ豊臣秀吉ヒデトイフ人ガ、ココニ、シロ城ヲキ
ヅイタ。コノ城ハ、今モ、ノコツテヲル。

○オホ大坂市ノ中ニハ、サカ大キナ堀ガ、イクスヂモ、通ツテヲル。ソ
レダカラ、舟デ、品物ヲハコブニハ、タイソタイソ、便利デア
ル。

オホ大坂市ノ中ニハ、サカ大イナル堀〇、イクスヂモ、通レリ。サ
レバ、舟ニテ、品物ヲハコブニハ、ハナハダ、便利ナリ。

オホサカ

○大坂市オホサカデ、外國カラ買ヒ入レル品物ハ、米ガ、イチバン、

オホイ。

大坂市オホサカニテ、外國ヨリ買ヒ入ルル品物ハ、米〇モットモ、
オホシ。

第九

豊臣秀吉トヨトミヒデオシ。

(一)

北條氏ホージョーシノアトニ、足利氏アシカガシガ、オコッタ。コノ足利アシカガ

氏シハ、ナガイ間マ武士ブシノカシラトナッテヨッタガ

ソノウチニ、アチラニモ、コチラニモ、ツヨイ

武士ブシガデテキテ、センソーヲシアッタ。ソレデ、

日本中が、タイソ、サワガシカッタ。コノ、ツヨ
 イ、^{ブシ}武士ノ中ニ、^{オダ}織田^ノ信長^{ナガ}トイフ人ガアッタ。豊^{トヨト}
 臣^ミ秀吉^{ヒデヨシ}ハコノ^ノ信長^ノケライデアッタ。
 秀吉^{ヒデヨシ}ハ^ヲ尾張^{ハリ}ノ國ノ人デアタイソ、カシコク
 テ、^ドキ^ョノ大キナ人デアッタ。ソレデ、ハジメ
 ニハ、^ノ信長^{ナガ}ノゾーリトリヨシテヨッタガ、ヨク、
 キヨツケテホーコーシタノデ、ダ^ンダ^ン、ヒ
 キアゲラレテ、マモナク一方ノ大將^{タイシヨ}ニナッタ。

ヒデヨシ



秀吉^{ヒデヨシ}ハ、金ノヒョータンヲウ

マジルシニシテ、千ナリヒョ

ータント名ヲツケテキタ。

コレハ、ゼンソーニカッタタ

ビニ、ヒョータンヌ、一ツヅツ、

フヤシテ、千ニシヨウト、コ

コロガケタカラデアル。

秀吉^{ヒデヨシ}ハ、ゼンソーガジョーズデ、イツデモ、テキ

ヲヤブツタ。ソレデ、千ナリヒョータンノウマジ
ルシヲ見ルト、テキハ、オソレテ、ニゲタトイ
フコトデアル。

○秀吉^{ヒデヨシ}ハ、金ノヒョータンヲウマジルシニシテ、千ナリヒョ
ータント名ヲツケテキタ。コレハ、センソーニカッタ
ビニ、一ツツツ、フヤシテ、千ニシヨウト、ココロガケタ
カラデアアル。

秀吉^{ヒデヨシ}ハ、金ノヒョータンヲウマジルシニシテ、千ナリヒョ
ータント名ヲツケタリ。コレ〇、センソーニカチタル

レバナリ。
タビニ、一ツツツ、フヤシテ、千ニセシト、ココロガケタ

第十

豊臣秀吉。

(二)

秀吉ヒデヨシが、信長ノブナガニイヒツケラレテ、ヨソデ、セン
ソ一ヲシテヲルトキノコトデアツタ。明智アケチ光ミツ
秀ヒデトイフモノが、京都キョウトデ、信長ノブナガヲコロシタ。秀ヒデ
吉ヨシハ、コレヲキイテ、スグ、テキト、ナカナホリ
ヲシテ、カヘツテキタ。ソシテ、ヒトイクサデ、光ミツ

秀ヒデヲコロシテ、信ノブ長ナガノカタキヲウツタ。

コレカラ、秀ヒデ吉ヨシハ、タイソト、人ニタツトバレタ。

ソレデ、ナカニハ、秀ヒデ吉ヨシヲソネンデ、イクサヲ

シカケタモノモアツタ。秀ヒデ吉ヨシハ、コレヲミンナ、

ホロボシテシマツタ。ソシテ、トトトト、日本中

ヲオダヤカニシタ。

ソコデ、ソノ時ノ天皇ハ、秀ヒデ吉ヨシヲ、イチバン、ヨ

イヤクニナサレテ、豊トヨ臣トミトイフ氏ウヂヲモクダ

サレタ。

ソノノ夫^{ヒデヨシ}秀吉ハ支^シ那^ナトイフ國ヲモウタウ。

トオモツテ、ヘイタイヲダクサン、ヤツテ、マヅ、朝^{チヨ}

鮮^{セン}トイフ國ヲセメサセタ。ヘイタイハ、ナン

ノクモナク、朝^{チヨ}鮮^{セン}ノミヤコニセメイッタ。スル

ト、支^シ那^ナモヘイタイヲダクサン、出^{チヨ}シテ、朝^{セン}鮮^{セン}

ヲ助ケタ。ワガ國ノヘイタイハ、マタ、ソノ支^シ

那^ナノヘイタイヲモヤブツタ。シカシ、ヲシイコ

トニハセ^{ヒデ}ンソ^{ヨシ}ーノスマンウチニ秀吉ハ病

氣ニカカ^ツテ死^ンデシマ^ツタ。

京都^{キョウト}ノ豊國^{ホーコク}神社^{ジンジャ}ハコノ秀吉^{ヒデヨシ}ヲマ^ツツ^タノ^デ

アル。

○秀吉^{ヒデヨシ}ハ支那^{シナ}ヲモウ^タウトオモ^ツテ、ヘイ^タイ^イヲ^クク^サ

ン、ヤ^ツテマ^ヅ朝鮮^{チョウセン}ヲセ^メサ^セタ。

秀吉^{ヒデヨシ}ハ支那^{シナ}ヲモウ^タントオモ^ヒテ、ヘイ^タイ^イヲ^クク^サ

ク、ヤ^リテマ^ヅ朝鮮^{チョウセン}ヲセ^メシ^メタ^リ。

第十一 としのくれ。

今

「花がさいいた。」と

いふうちに、

いつか野山が

青くなり、

「あつい。あつい。」と

いふうちに、

いつか木のはが

あかくなる。」

はちり、しもふり、

雪ふりて、

白くなりたり、

山のみね。

あし。今月は

十二月。

あし。もうけふは

二十日すぎ。」

來

十日たたねに、

としもとり、

花が、また、さく

四月には、

四年生にも、

ぼくは、なる。

なまけることが

できはせん。

ことしは、すこし、

休んだが、

もう、來年は、

休まんぞ。

雨がふっても、

さむくても、

休みはせんぞ。

せい出すぞ。

○あしたは、雪がふるだらう。

あすは、雪○ふるならん。

あすは、雪○ふるなるべし。

○雪がふっても、學校を休むな。

雪○ふるとも、學校を休むべからず。

第十二 新年しんねんのいはひ。

文太郎は、一月一日の朝、早くおきて、妹ととも
に、父と母とに、

「おとうさん、新年おめでたうございます。」

父
新年

祝

おかあさん。新年おめでたうございます。」

といひて、新年の祝いはひをのべたり。

父も、母も「おめでたう。」といひたり。

そのあとにて、文太郎はうちじゆーのものとも、にぞしにをたべて、学校の祝の式しきに行きたり。


文太郎が、学校よりかへりしとき、母は、文太郎に、

明治

新年おめでたう
ございます

明治三十八年一月一日

きかは郵便



大坂市……………
品川金三郎様

東京市……
松村文太郎

「をぢさんのところ

へお祝のはがきを

おだしなさい。」

といひたり。

文太郎は父より、はが

きをもらひて、上のよ

しに、書き、郵便箱ゆうびんばこに

入れたり。

遊

それより、文太郎は妹をつれて、おもてに出
でて、遊びたり。

○文太郎は、いつも朝早くおきる。文太郎のおきるとき
には、妹もおきる。おきると二人で、父と母とにあいさ
つする。

文太郎は、いつも朝早くおきる。文太郎のおきるときに
は、妹もおきる。おくれれば、二人にて、父と母とにあいさつ
す。

第十三

商業しやうぎやう

見習

主人

商業

太郎の兄は、ある呉服屋ごふくやに、商業しやうぎやうのしかたの見習けんじゆについておます。この兄が、一月のなかでござる、主人からひまをもらつて、かつてきました。太郎は、たいそし、よろこんで、いろいろのこゝとをたづねました。兄は、いぢいぢて、いねいに、いつてきかせました。

「いさん、商業といふのは、どんなことをするのですか。」

屋

「商業といふのは品物を賣ったり買ったりする
ることなどをいふのです。」

「それではにいさんのいておらっしゃるよー
な呉服屋も商業をしてゐるのですね。」

「さうです。呉服屋も、米屋も、石油屋も、材木
屋も、みんな商業をしてゐるのです。」

「その呉服屋や米屋などは、じぶんで織物
を織ったり、稲を作ったりするのですか。」

「いーえ。たいてい、呉服屋は呉服問屋から、米屋は米問屋から買ひ入れるのです。呉服問屋といふのは、西陣のよーな、織物のできるところから、たくさん、織物を買ひあつめて、それをほーぼーの呉服屋に、賣る店をいふのです。また、米問屋といふのは、おなかのよーな、米のできるるところから、たくさん、米を買ひあつめて、それをほ

「ぼーの米屋に、賣る店をいふのです。こ
んな問屋とひやは、石油屋にも、材木屋にも、みん
なあります。」

「おー。わかりました。それでは、呉服問屋ごふくどひやは、
織物のできるところから、買ひあつめて、
呉服屋ごふくに、賣り、米問屋こめどひやは、米のできるところ
から、買ひあつめて、米屋に、賣るのです。
ね。また、呉服屋ごふくは、呉服問屋ごふくどひやから、買ひ入れ、

米屋は、米問屋こめどひやから買ひ入れて、人に賣る
のですね。」

「さうです。そして、呉服問屋ごふくどひやや米問屋こめどひやなど
が、呉服屋ごふくやや米屋などに、賣るのを卸賣おろしうりと
いひ、呉服屋ごふくや米屋などが、人に賣るのを
小賣といひます。」

「はい、さん。商業をすると、ぜにがまうかり
ますか。」

「商業をしても、正直にせんと、人が買ってく
 れませんから、錢がまうかりませぬ。しか
 し、正直にさへすれば、人がたくさん買って
 くれますから、錢がまうかります。」

第十四 銅あかがねと鐵てつ。

(一)

あるばん、金物屋かなものの店あかがねで、銅あかがねのなかまてつと、鐵てつの
 なかまあかがねとがあつまって、銅あかがねと鐵てつとは、どちらが、
 人のやくにたつか。といふことについて、い

銅

ひあひをした。

しかし、いつまでいひあつてもたださあがし
いばかりで、なかまかまけかちがつかなん
だ。それで、りよーほーから、一人ひとりづつ、出ていふ
ことになった。

銅のなかまからは、銅のかただらひが出る
ことになり、鐵てつのなかまからは、てつびんが
出ることになった。

銀



まづ銅のかなだら
ひが出て、次のよー
にいった。

「かねには、金、銀、銅、
鐵^{てつ}、じんち^ゆーなど、
いろいろあるが、
なかでもいちば
ん、人のやくにた

美

つものは銅だ。

金と銀とは美しくて、貨幣かへいをこしらへる
にも、時計とけいやゆびわや、そのほかのかがり
ものをこしらへるにも、つかはれるがど
ちらのかねも、たくさんなくて、ねだんも
たかい。

それだのに、銅は金や銀よりも、たくさん
あって、ねだんもやすい。そして、やっぱり、貨幣かへい

をこしらへるにも、つかはれ、また、はりが
ねや、やかんや、あたくしのよ—なかなだ
らひなどをこしらへるにも、つかはれる。
して見れば、銅ほど人のやくにたつもの
は、ほかには、あるまい。鐵てつのよ—な貨幣かへいを
こしらへるにも、つかはれず、じきに、さび
て、赤くなるものとは、くらべものにはな
らん。

かなだらひが、かう、いってしまふと、銅のなか
まは、みんを、さうだ。さうだ。』と、いって、手をうった。

第十五 銅と鐵。

(二)

こんどは、てつびんが出て、次のよーに、いらた。
「なるほど、銅は、たくさん、あつて、ねだんもや
すい。また、ずいぶん、人のやくにもたつ。し
かし、鐵は、銅よりも、もつと、たくさん、あつて、ね
だんも、もつと、やすい。そして、ごとくをこし

刀

らへるにも、つかはれなべや、かまや、わた
くしのよーなてつびんなどをこしらへ
るにも、つかはれる。また、そのほか、くぎ、こ
がたな、ほーちよー、すき、くはなどかられー
る、きかんし、ヤ刀、銃、じゆ大砲、軍艦、かんなどまで、みん
な、鐵がなくてはできん。

して見れば、鐵は、貨幣かひをこしらへるにこ
そ、つかはれんが、人のやくにたつことは

銅よりもずっとおほいではないか。

また、鐵は、じきに、さびて、赤くなるといふが、銅も、じきに、青いものを出すではないか。あれが、やっぱり、さびるのだ。鐵のよーに、さびるだけなら、よいが、銅が、さびて、青いものを出したのは、たいそしどくになるのだ。それで、かなだらひなども、しんちゅうで、こしらへられるよーになつてきたでは

ないか。

そして、銅は、人につかはれておても、どく
なものを出すが、鐵は、人につかはれてさ
つおれば、いつも光っておる。鐵のさびるの
は、人がつかはんからだ。」

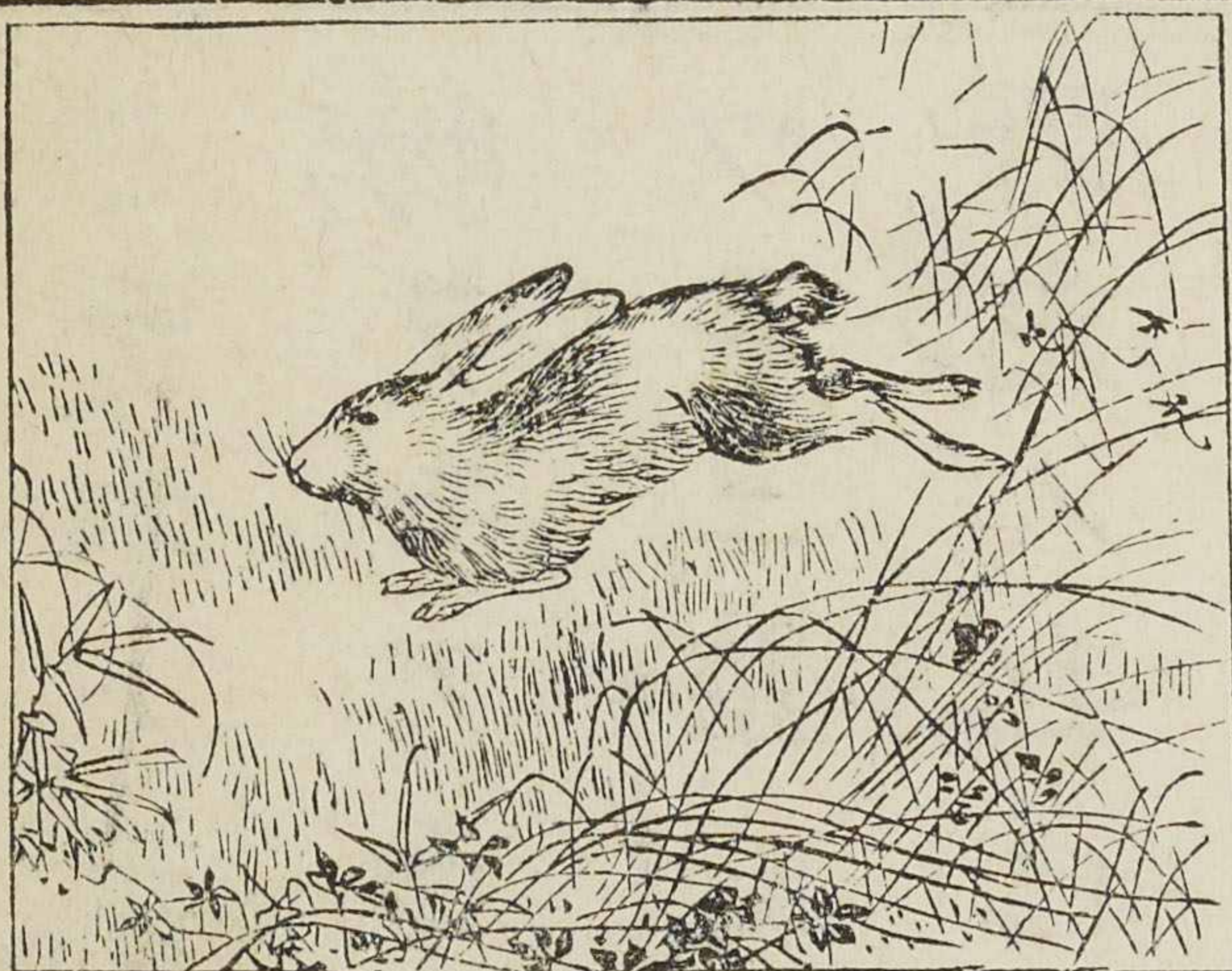
てつびんが、かう、いってしまふと、鐵のなかま
は、みんな「さうだ。さうだ。」と、いって、手をうった。
銅のなかまも、きいてみれば、もともたので、

短

みんなだまっておた。

第十六

兎ウサギ。



コノエヲ見ヨ。コレハ兎ウサギノエナリ。耳ハハナ

ハダ長クシテウハクチビルハニツニワレ

タリ。マタ前足ハ短クシテ後足アトアシ

ハ長シ。

兎ウサギニハ野兎ウサギトカヒ兎ウサギトアリ。野

兎ウサギハイツモ山マタハ野原ニス

食

冬

肉味

ミテ、木ノ芽^メナドヲ食ヒ、マタ、豆^{マメ}、麥^{コムギ}ナドノ作^{サク}

物^{モノ}ヲモアラス。カヒ^{ウサギ}兎ハ、人ノ家ニカハレテ、

ツネニ、草^ヤ、野菜^{サイ}、穀^{コク}物^{モノ}ナドヲ食フ。

野^ノ兎^{ウサギ}ノ毛色ハ枯^{カレ}葉^ハノ色ニニタリ。サレド、雪

ノフルトコロニスムモノハ、冬ハ、白ク、カハ

ル。カヒ^{ウサギ}兎ノ毛色ハサマガマニシテ、冬モ、カ

ハルコトナシ。

兎^{ウサギ}ノ肉ハ味ヨク、毛ハ、筆ノ毛トスルニ、ヨロ

シ。

第十七 草木ノカケクラベ。

アル日、草木ガ、ミンナ、ヨッテ、カケクラベヲシ
タ。ソレハ、ナカナカ、ダイソーナカケクラベ
デ、高イ山ノフモトカラ、チョージョーマデ、ハシッ
テイカウトイフノデアッタ。

ハジメニ、木ノナカマハ、ミンナ、カウイッテ
タ。草ハ、トテモ、カツコトハ、デキマイ。カツモ

寒

ノハ、ワレワレ、木ノナカマデ、ナカマノ中デ
モ、檜ヒノキハ木ノ王オノサマ様ダカラ、檜ヒノキガカツダラウ。ト
イッテ申タ。

トコロガ、ダンダンノボッテ行クト、ダンダン、
寒クナッテキテ、檜ヒノキハ、モウノボルコトガデキ
ンヨ一ニナッタ。スルト、ブナノ木ヤ松ノ木ナ
ドガオヒコシタ。草モオヒコシタ。
マタ、ダンダンノボッテ行クト、マタ、ダンダン、

寒クナツテキテブナノ木モ、モウ、ノボルコト
ガデキンヨ一ニナツタ。草ニモ、ホカノ木ニモ、
モウ、ノボルコトガデキンヨ一ニナツタモノ
ガ、タクサン、アツタ。

ケレドモ、松ノ木ハ「ジブンハ寒イノガスキ
ダ。」トイッテ、オヒコシタ。ソノウチニ、松ノ木モ
ノボルコトガデキンヨ一ニナツタ。ソシテ、松
ノ木ハ「モウ、アンマリ、寒クテ、ジブンハノボ

強

ルコトガデキン。シカシ、ココマデ來ルコト
ノデキルモノハ、ジブンヨリホカニハ、アル
マイ。トイッテ耳タ。トコロガ、アル草ナドハ、松
ノ木ヲオヒコシテ、ノボッテ行ッダ。松ノ木ハ、草
ノ中ニ、ジブンヨリ、モット、強イモノガアルノ
ニ、オドロイタ。

サテ、草ハ、ダンダン、ノボッテ行ッダガ、ソレハ、ソ
レハ、寒クテ、サキノ見エンホド、雪ガアルヨ

一ニナツタノズドノ草モ、チョージョーマデハノ
ボルコトガデキナシダ。

コノトキ、草ヲオヒコシテ、トートー、チョージョ
一ニ着イタモノガアツタ。ソレハアマリ人ノ
キヅカン苔コケデアツタ。

第十八 明治二十七八年せんえき戦役。(一)

外國の中で、いちばん、わが國に近いのは、韓かん
國こくと清國しんこくとであります。わが國は、昔から、こ

約束

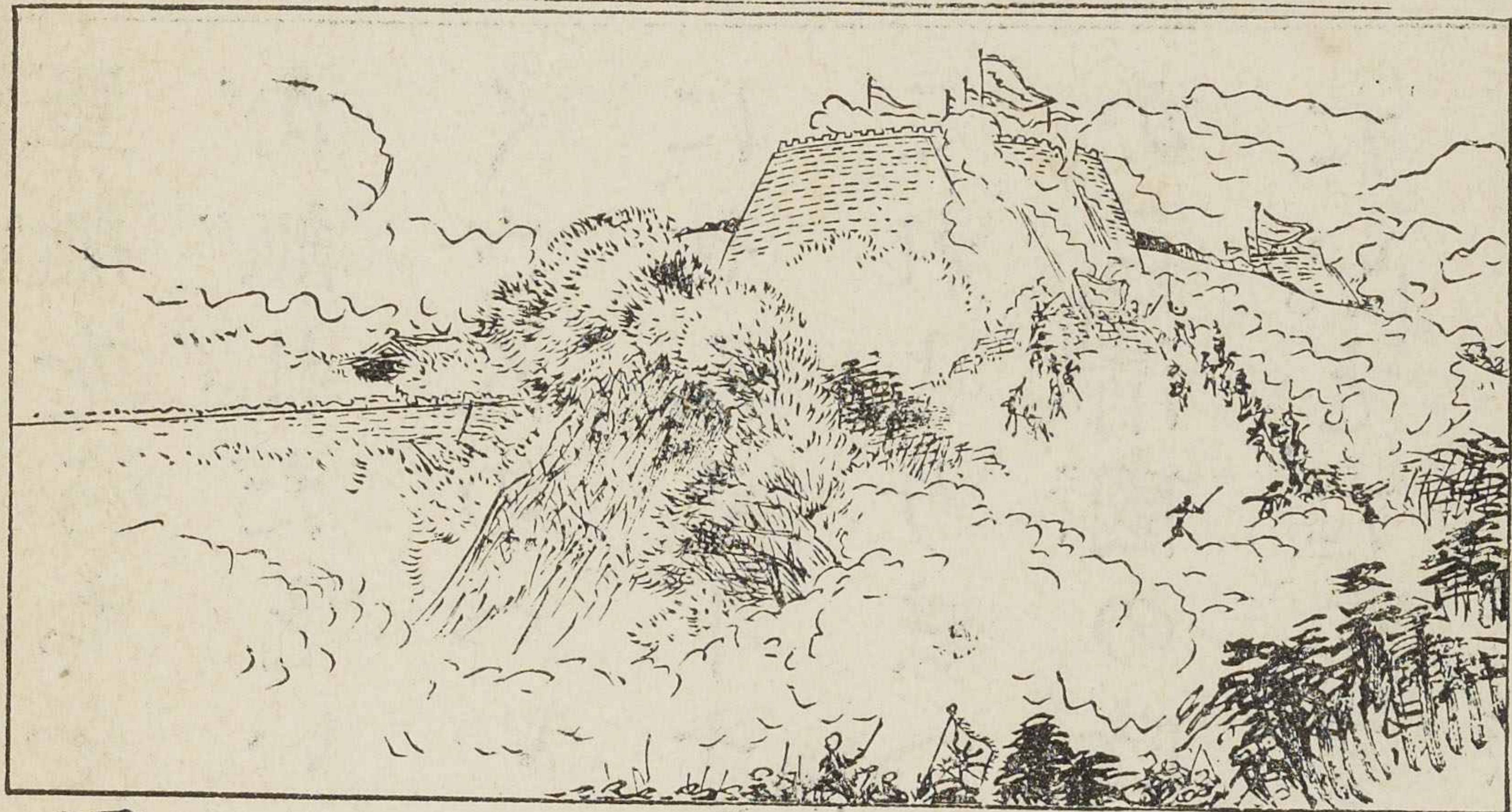
の、二つの國と、なかよくつきあつてきました。
ところが明治二十七年、韓國に、そーどーの
おこつた時に、清國は、わが國との約束にそむ
いて、ことわりなしに、いたいを韓國にお
くりしました。そして、そのうへに、韓國の豊島
沖といふところで、清國の軍艦はわが國の
軍艦に大砲をうちかけました。
そのとき、わが國の軍艦は、くもなくてきの

軍艦
そら
つ
ぶ
り
ま
し
た
が
あ
ら
ま
り
青
國

陸軍

軍艦ぐんかんをうちやぶりましたが、あんまり清國しんこくが無礼ぶれいだといふので、とーとー、わが國はたくさんのへいたいを出して、清國しんこくをあひてに、せんそーすることになりました。

これよりまへに、わが陸軍は、わが國が韓國かんこくから清國しんこくの陸軍をうちしりぞけてもらひたい。と、たのまれたので、韓國かんこくの成歡せいかんといふところで、清國しんこくの陸軍をうちやぶりました



が、そこでつづいて平壤へいじょうといふところでも、
さんざんにうちやぶりました。
た。そしてだんだんと清國しんこくに
せめ入りました。

あの黄海こーかいの戦たたかひのあったのは、こ
の平壤へいじょうの戦たたかひのあった二日あと
のことです。清國しんこくの海
軍は、黄海こーかいの戦たたかひに、やぶれての

ちは威海衛といふところににげこんでお
ました。

第十九 明治二十七八年戦役。

(二)

このころ、わが國はまた、べつに、陸軍を出し
て、清國の旅順口といふところをせめまし
た。この旅順口は、守ることにはらくで、せめる
ことはたいそしむづかしいところであり
ました。わが陸軍は、たった一日で、そこをせ

守

めおとしてしまひました。てきこのいきほひは、これからはかによまりました。

わが海軍は「ここだ。」とおもつて、わが陸軍といふしよにてきこの海軍のにげこんでおる威海衛威海衛をせめました。そして、その砲臺砲臺をせめおとしたり、軍艦軍艦をうちしづめたりしました。てきこの海軍は、みんなこーさんしてしまひました。わが陸軍は、すすんで、清國清國の都都の北

京きんをせめたりした。

京^{きん}をせめようとししました。

清國^{しんこく}はたいそーおそれて、使をわが國によこして、なかなほりをしてくれ。と申しこみました。わが國は、たくさんの金と、臺灣^{たいわん}といふ大きな島^{しま}などをとって、なかなほりをしてきました。

このせんそーのあったのは、明治二十七年から、二十八年にかけてのことです。

ら、これを明治二十七八年戦役せんえきといひます。
 その後、明治三十三年にも、清國しんこくのうちの北
 の方に、そ—ど—のおこつたことがあります。
 これを明治三十三年清國事變しんこくじへんといひます。
 この清國事變しんこくじへんは、わが陸軍と、外國の陸軍と
 が、い—しよになつて、しづめました。が、その時にも、
 わがへいたいが、いちばんよく、はたらいて、
 また、いちばんきりつがたつてをりました。

わが國のひよーばんは、この明治二十七八年
戦役せんえきと明治三十三年清國事變しんこくじへんとで、世界中せかいじゅう
に、高まるよーになつたのであります。

第二十 臺灣たいわん。

暑
臺灣たいわんハ、ワガ國ノウチニテ、モットモ、西南ニア
ル島しまニシテ、ハナハダ、暑キトコロナリ。

土地
臺灣たいわんハ、カク、暑キウヘニ、土地、マタ、コエタレ
バ、稻、早ク、ミノル。サレバ、一年ニ、二度ドマタハ、

茶

三度^ド取^{トリ}入^イヲナス。

臺^{タイ}灣^{ワン}ハ、米ノホカ、シ^ショーノ^ノ、石炭、砂^サ糖^ト茶^チナド

ヲモ、オホク、出ス。ナカニモ、砂^サ糖^トハ、モ^トモ、名

高^{タカ}シ。

島

臺^{タイ}灣^{ワン}ハ、モト、清^{シン}國^{コク}ノ島ナリシガ、明治二十八

年ヨリ、ワガ國ノモノトナリタルナリ。

臺^{タイ}灣^{ワン}ニハ、新^{ニヒ}高^{タカ}山^{ヤマ}トイフ山アリ。コノ山ハ、ワ

ガ國ノ山ノ中ニテ、モ^トモ、高キ山ナリ。

マタ、タイワン臺灣ニハ、タイワンジンジャ臺灣神社トイフ社アリ。コノ
社ニハ、モトノ北キタシラカハノミヤ白川宮ヲモマツレリ。

さきごろ、たいわん臺灣にいてゐるを
ぢのところから、むかふの寫しゃ
眞しんを、たくさん、おくてよこし
ました。そのなかには、にひたかやま新高山、
たいわんじんじや臺灣神社などをうつしたも
のや、そのほか、まだ見たこと

枚

もないものが、何枚も、ありま
す。そのうちに、あそびにきて、
ごらんなさいませんか。

三月一日

野口勇作

田島新藏様

お手紙をくださいます。あ
りがたうございます。さっそく、
父に話しましたら、それはめ

づらしいものだ。ぜひ見せて

づらしいものだ。ぜひ見せて
いただけと申しました。この
次にちよーびにまわりま
す。どうぞ見せてください。

三月三日

田島新藏

野口勇作様

第二十一

北きた白しら川かは宮のみや。

明治の二十八年に

多

臺灣島たいわんとうにおこりたる

あるものどもを

しづめんと、

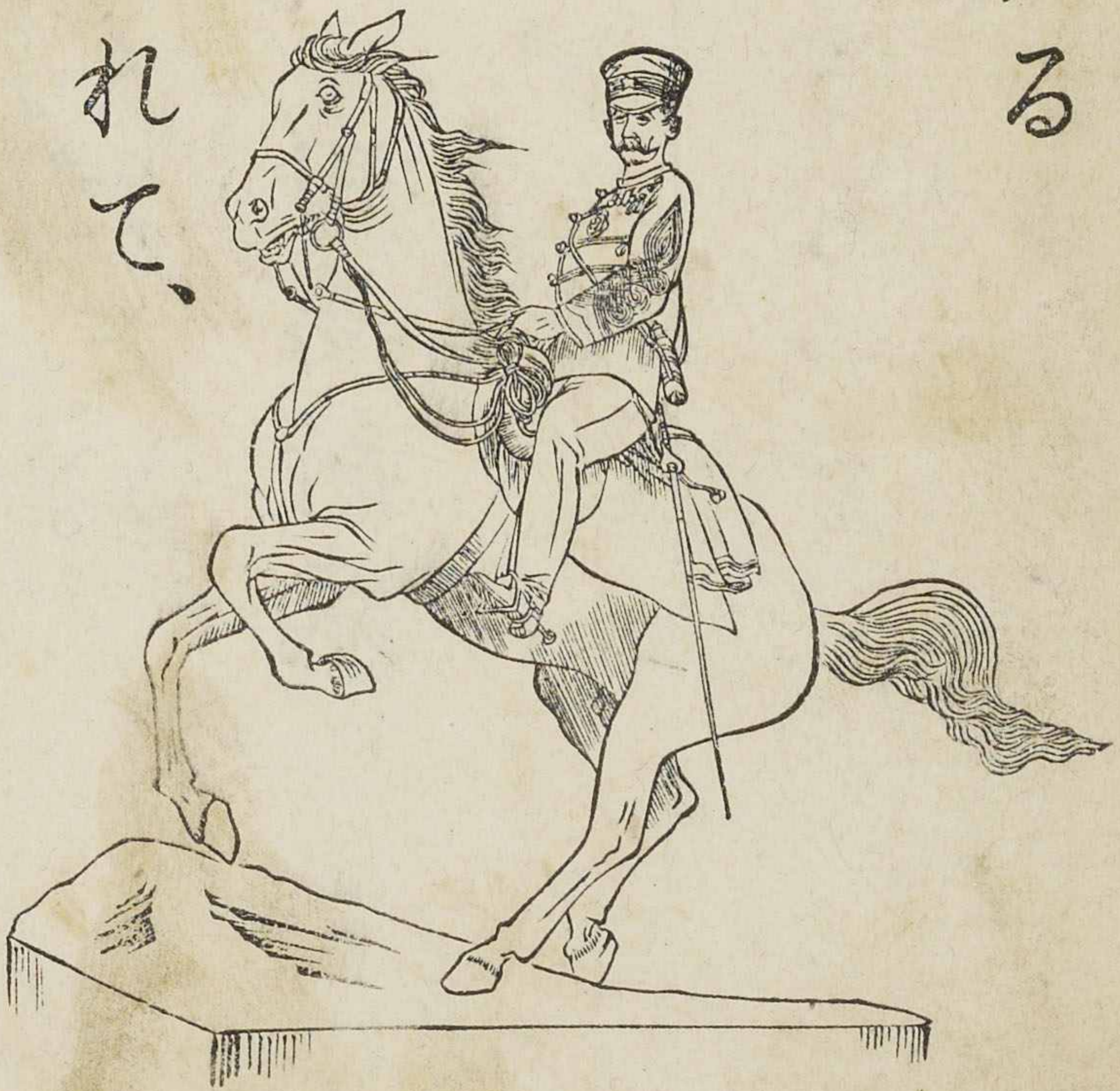
北きた白しら川かはのみや宮みや殿でん下か、

多くの軍人ひきつれて、

勇んでおいでなされたり。

ちよど六月七月の

暑さきびしきそのうへに、



道 食

水はすくなく、食たらず、

山はけはしく、道わるし。

いくさにつよき軍人も、

このなんぎには、よありたり。」

宮みやは、なんぎをいとはれず、

軍人どもをはげまして、

すすんで、せめて、あるものを、

おほかた、おしづめなされしに、

物

ふと、御病氣にかかれて、
をしやおかかれなされたり。

第二十二

砂糖ト塩シホ。

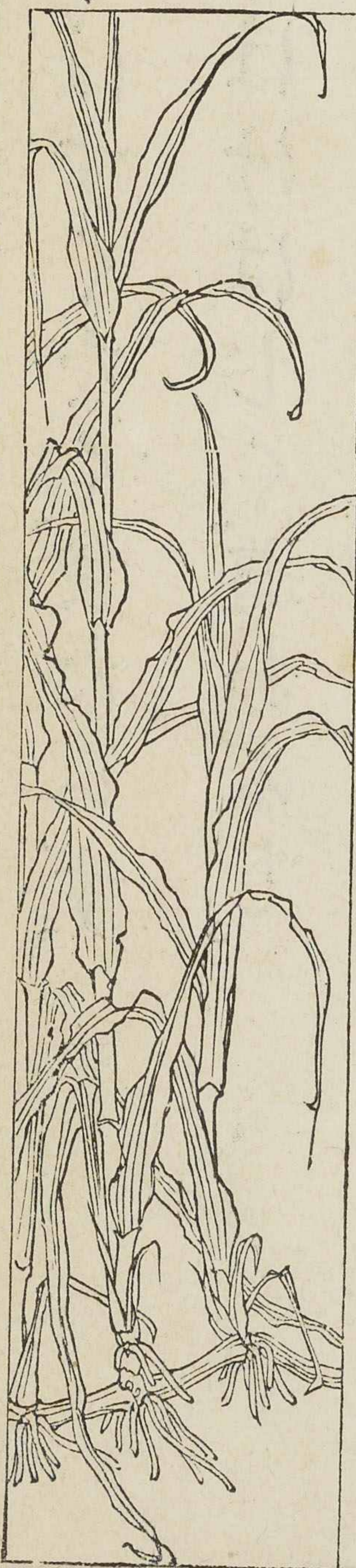
食物ノ味ヲツクルニ、入用ナルモノ、ニツ、ア

リ。一ツハ砂糖サトニシテ、一ツハ塩シホナリ。

砂糖サトハ、タイテイ、サトセイーキビヨリ、製ス。サト

ーキビ

ハト



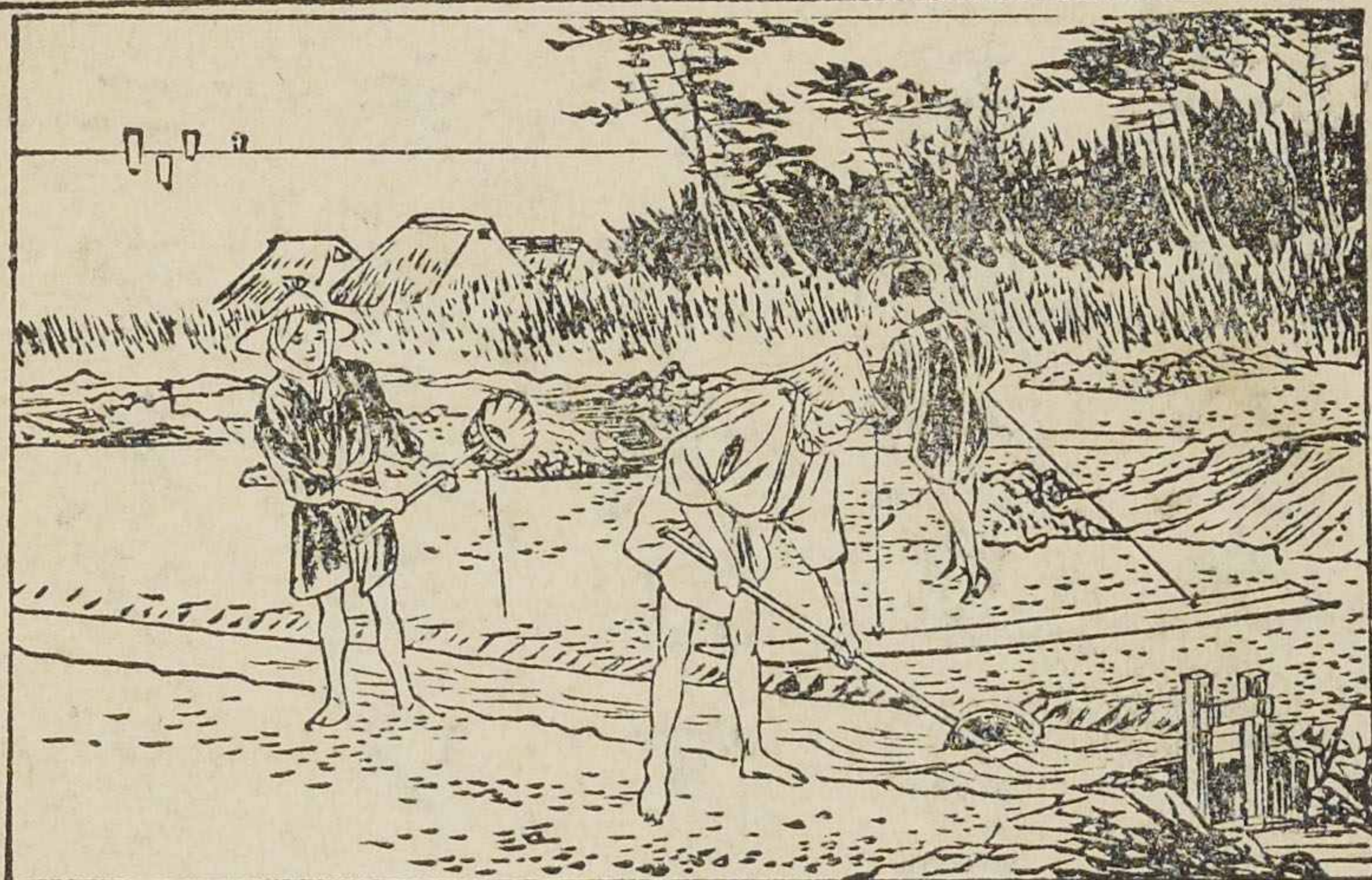
用汁

モロコシニニタルモノニシテ、暑キトコロ
ニ、ヨク、ソダツモノナリ。ソノクキニハ、アマ
キ汁多シ。ワレラノ用フル砂糖ハ、ソノ汁ヲ
トリテ、カマニテ、ニツメタルモノナリ。

砂糖ハ、ワガ國ヨリモ、出ヅレドモ、ソレノミ
ニテハ、ダラザレバ、多クハ、外國ヨリ、買ヒ入
ル。

塩シホハ、タイテイ、海ノ水ヨリ、製セイス。海ノ水ヨリ、

砂



製スルニハ、マヅ、田ニニタルモノヲツクリ
テ、砂ヲシキ、コレニ海ノ水ヲカクルナリ。カ

クテ、日ニサラセバ、塩カタマリ
テ、砂ニツク。ワレラノ用フル塩

ハ、コレヲ海ノ水ニテ、トカシ、カ
マニテ、ニツメタルモノナリ。

塩ハ、ワガ國ヨリ、多ク、出ヅレバ、

外國ヨリ、買ヒ入ルルコトスクナシ。

をはり。

72425

国立国語研究所



1000605053

明治三十六年十二月廿六日印刷
 明治三十六年十二月廿八日發行
 明治三十七年二月廿八日翻刻印刷
 明治三十七年三月二日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行

翻刻
發行

印刷者

印刷所

文部省

龜井忠一

東京市神田區萬神保町壹番地

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

東京市日本橋區新右衛門町拾六番地

日本書籍株式會社

發行所

明治三十七年二月廿七日
 文部省檢査濟

尋常小學讀本卷六

定價金八錢五厘

1844

1845

1846

1847

0. 0
24

